

令和 5 年度 障害者スポーツ推進プロジェクト
特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業

成 果 報 告 書

令和 6 年 1 月

神戸市教育委員会

令和５年度 「障害者スポーツ推進プロジェクト」 成果報告書

目次

I. 事業実施報告

1. 中高生パラスポーツクラブ
（障害者に配慮されたスポーツ施設における放課後の運動機会の提供） …… 1
2. 中高生パラスポーツクラブ
地域出前型スポーツパッケージ（モデル事業） …… 2
3. ウィークエンドスポーツクラブ …… 4
4. 指導者等の養成 …… 5

II. 満足度

1. 参加者の満足度 …… 6
2. 保護者の満足度 …… 6
3. 指導者の養成等 研修受講者の満足度 …… 9

III. 保護者アンケート調査および報告 …… 11

IV. まとめ …… 13

I. 事業実施報告

1. 中高生パラスポーツクラブ

(障害者に配慮されたスポーツ施設における放課後の運動機会の提供)

放課後に市内の拠点運動施設（しあわせの村）まで送迎し、運動機会を提供した。

対象：市立特別支援学校及び神戸大学附属特別支援学校のうち、
地域出前型スポーツパッケージ（モデル事業）を実施しない学校の中高生
※送迎場所より自力で帰宅できる方

定員：1校あたり20名

回数：1校あたり5回

利用者負担：2,500円

募集方法：対象者にチラシ配布、保護者宛メール（各校の協力による）

参加者数：37名（延べ164人）

・実施校および日程

学校名	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
神戸大学附属特別支援学校	9月13日	9月27日	10月4日	10月31日	11月22日
	水	水	水	火	水
神戸市立 友生支援学校	9月19日	10月3日	10月24日	11月14日	12月5日
	火	火	火	火	火
神戸市立 青陽須磨支援学校	9月20日	10月11日	10月25日	11月1日	12月6日
	水	水	水	水	水

※友生支援学校（ダンス）のみ最終回の日程を変更して12月19日に実施

・実施種目、会場、指導者

種目	会場	指導者
卓球	温泉健康センター 体育館	(株) ウエルネスサプライ (3名)
ダンス	温泉健康センター スタジオ	(株) ウエルネスサプライ (3名)
テニス	テニスコート	美津濃(株)、NPO法人TOPO (各1名)

・参加実績

学校名	参加者計	種目別参加者数		延参加数
神戸大学附属特別支援学校	15名	卓球	5名	71人
		ダンス	5名	
		テニス	5名	

種目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
卓 球	5	5	5	5	5
ダンス	5	5	3	4	5
テニス	5	5	5	4	5
合 計	15	15	13	13	15

71

学校名	参加者計	種目別参加者数		延参加数
神戸市立 友生支援学校	13名	卓 球	5名	57人
		ダンス	7名	
		テニス	1名	

種目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
卓 球	4	3	5	5	5
ダンス	7	6	6	6	6
テニス	0	1	1	1	1
合 計	11	10	12	12	12

57

学校名	参加者計	種目別参加者数		延参加数
神戸市立 青陽須磨支援学校	9名	卓 球	2名	36人
		ダンス	5名	
		テニス	2名	

種目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
卓 球	1	2	2	2	2
ダンス	4	2	4	3	5
テニス	2	1	2	2	2
合 計	7	5	8	7	9

36

2. 中高生パラスポーツクラブ 地域出前型スポーツパッケージ（モデル事業）

特別支援学校の運動部活動の地域実施にむけた新規モデル事業として実施した。

対象：市内特別支援学校で体育館など運動施設の利用が可能な学校の中高生

※終了後、自力または保護者の迎えで帰宅できる方

定員：1会場あたり20名

回数：1会場あたり5回

利用者負担：2,500円

募集方法：対象者にチラシ配布、保護者宛メール（各校の協力による）

参加者数：29名（延べ132人）

・実施校および日程

学校名	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
神戸市立 灘さくら支援学校	9月26日	10月17日	11月7日	11月28日	12月12日
神戸市立 青陽灘高等支援学校	火	火	火	火	火
神戸市立 いぶき明生支援学校	11月8日	11月21日	11月28日	12月13日	12月20日
	水	火	水	水	水

※灘さくら支援学校と青陽灘高等支援校は合同で実施（会場：灘さくら支援学校）

・実施種目、会場、指導者

■灘さくら支援学校 会場

種 目	会 場	指導者
卓 球	灘さくら支援学校 体育館	(株) ウエルネスサプライ (3名)
ダンス	灘さくら支援学校 動作学習室	NPO法人ダンスボックス (2名)

■いぶき明生支援学校 会場

種 目	会 場	指導者
卓 球	いぶき明生支援学校 運動スペース	神戸市卓球協会 (2名)
ダンス	いぶき明生支援学校 動作学習室	(株) ウエルネスサプライ (3名)
バドミントン	いぶき明生支援学校 体育館	(株) ウエルネスサプライ (3名)

・参加実績

学校名	参加者数	種目別参加者数	延参加数
神戸市立 灘さくら支援学校	13名	卓 球	6名
神戸市立 青陽灘高等支援学校		ダンス	7名
			61人

種目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
卓 球	4	5	6	6	6
ダンス	6	7	7	7	7
合 計	10	12	13	13	13

61

学校名	参加者数	種目別参加者数	延参加数
神戸市立いぶき明生支援学校	16名	卓 球	4
		ダンス	6
		バドミントン	6
			71人

種目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
卓 球	3	3	3	3	3
ダンス	6	6	6	6	6
バドミントン	6	6	4	5	5
合 計	15	15	13	14	14

71

3. ウィークエンドスポーツクラブ

週末の運動機会の提供。週末の地域展開の検討に向け、運動ニーズの把握や放課後開催との比較を目的に週末モデルとして実施した。

対象：市内在住の特別支援学校（県立等含む）や特別支援学級、通級指導教室利用の中高生

会場：しあわせの村の運動施設

定員：3 種目 計 30 名

実施曜日：土曜日

実施回数：全 6 回

利用者負担：3,000円

募集方法：対象校にチラシ配布、保護者宛メール（各校の協力による）

参加者数：15 名（延べ 68 人）

・実施種目・会場・指導者

種 目	会 場	指導者
卓 球	温泉健康センター 体育館	(株) ウエルネスサプライ (3名)
ダンス	温泉健康センター スタジオ	(株) ウエルネスサプライ (3名)
陸 上	温泉健康センター 体育館	NPO法人神戸スポーツリンク (2名)

・実施日程

1回目	2回目	3回目	4回目	5 回目	6 回目
10月7日	10月14日	11月11日	11月18日	12月2日	12月16日
土	土	土	土	土	土

・参加実績

参加者数	種目別参加数		延参加数
15名	卓 球	7	68人
	ダンス	4	
	陸 上	3→4	

※陸上：1～3回目(3名)、4回目以降(4名)

種目	参加者数	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
卓 球	7	6	5	6	5	4	5
ダンス	4	4	4	4	1	4	4
陸 上	4	1	3	3	2	3	4
合 計	15	11	12	13	8	11	13

68

（参加者の内訳）計 15名

※県立特別支援学校(神戸市在住者)

高等部 1 名

市立特別支援学校在籍者

中学部 3 名、高等部 5 名

市立支援学級在籍者

中学校 6 名

4. 指導者等の養成

特別支援学校等の中高生を対象とした運動指導に関わる人材の育成を目的に、障害理解、運動提供に係る準備から提供までの留意事項やスポーツ実践などを学ぶ講座を開催した。

対象：18歳以上 市内で障害児・者への運動提供に関わる意欲のある方、パラスポーツの指導・支援に関心がある方

会場：しあわせの村 研修館他

定員：20名

回数：全3回（半日×3回）

受講料：1,000円

募集方法：パラスポーツ指導者資格取得認定校、市内及び近隣の大学、市内スポーツ施設、各区役所・社会福祉協議会、障害者スポーツ関係団体等にチラシ配布及びメールで案内

参加者数：13名（3回 延べ 31人）

・実施日程およびプログラム

第1回	時間	内 容	参加者数
11月18日 (土)	10:00	開講 オリエンテーション	11名
	10:30	ウィークエンドスポーツクラブ見学	
	11:20	講義「アンダーマネジメント」 講師 武庫川女子大学 健康・スポーツ科学部 准教授 田中 美史氏	
	12:00	終了	

第2回	時間	内 容	参加者数
11月18日 (土)	13:00	講義「特別支援学校における運動部活動のマネジメント」 講師 立命館大学 産業社会学部 教授 金山 千広氏	10名
	13:45	コミュニケーションマネジメント実践 講師 立命館大学 産業社会学部 教授 金山 千広氏	
	14:45	休憩	
	15:10	実践に向けて（次回参加種目ごとに打ち合わせ）	
	15:30	終了	

第3回	時間	内 容	参加者数
12月2日 (土)	10:00	集合 種目別に打ち合わせ	10名
	10:30	ウィークエンドスポーツクラブ参加	
	11:30	クラブ終了	
	11:50 12:20	振返り 終了	

II.満足度

本事業を実施することで達成を目指す目標として、生徒、保護者の満足度調査において「満足している」の回答80%以上を目指すことを設定していた。

1. 参加者（生徒）の満足度

・調査方法

立命館大学産業社会学部 教授 金山千広氏による「参加者による形成的評価」での調査研究から、毎回プログラム終了後に参加者を対象に実施した調査（＊１）から、調査項目「たのしかった」に対する参加者の回答を用いる。

Q. たのしかった （「はい」、「まあまあ」、「いいえ」から１つを選択）

回答数335名／延参加者数 364名（回答率 97.5%）

参加者数	延参加数	回答数	はい	まあまあ	いいえ	満足度
81	364	355	345	9	1	97.1%

2. 保護者の満足度

・調査方法

参加者の保護者を対象として、プログラム終了後にアンケート調査を行った。
アンケート用紙（＊２）

Q. 今回のプログラムに参加して、お子さまは楽しまれましたか

（１）中高生パラスポーツクラブ（しあわせの村会場）

回答26名／参加 37名（回答率70.2%）

とても楽しんでた	楽しんでた	あまり楽しんでいなかった	楽しんでいなかった	満足度
23名	3名	0名	0名	100%

＜お子さまの参加後の様子＞

- ・ダンスは以前からもとても好きですが、どうしても家で一人でDVD等を見ながらということが多く、多人数で指導してもらいながらという形であっても、毎回参加を楽しみにしていましたので、取り組む意欲が感じられました。
- ・家のテーブルで簡易卓球をするようになりました。家での過ごし方ではテレビかYouTubeをみるかの２択になりがちなので、一緒にできることが増えて良かったです。
- ・毎回、こんなことしたとか、これが難しかったとか、楽しかったこととか、色々と話しています。
- ・一緒に参加したメンバーの仲間意識が強くなったようで、さらに仲良くなれたようでした。
- ・今まで身近になかった競技を体験出来て視野が広がったように思います。
また機会があったらパラスポーツに参加したいと言ってました。
デイでは家まで車で送ってもらうのですが、パラスポーツでは名谷駅まで送ってもらい、地下鉄で家まで1人で家に帰ることが新鮮で新しい体験だったようです。
- ・慣れない場所で、しかも放課後となると「行かない」と言うことがほとんどでしたが、今回は行く気になってくれました。
- ・すごく楽しかったようで、パラスポーツクラブから帰ってきた時はいつも以上によくしゃべり、

- 笑顔が増えたように思いました。
- 家でストレッチをすることが増えた。

(2) 地域出前型スポーツパッケージ（モデル事業／支援学校会場）

回答23名／参加 29名（回答率79.3%）

とても楽しんでいた	楽しんでいた	あまり楽しんでいなかった	楽しんでいなかった	満足度
20名	3名	0名	0名	100%

<お子さまの参加後の様子>

- 変化はありませんが（余暇でダンス教室に通っているため）、いつもダンスレッスンの後は楽しかった～と笑顔で帰ってきました。
- 習い事をさせたいけど、やっぱり少し気が引けてしまっていてできないのでこういう機会はとてもありがたいです。
- 学校で卓球をする機会もあり、今までより楽しめるようになった。
- 放課後の卓球の様子など、帰ってきてから話してくれる。学校内でも新しく友達ができたようです。
- バトミントンをする機会が増えた。褒められた話しや上手くできた事など、自信が持てたよう。

(3) ウィークエンドスポーツクラブ（しあわせの村会場）

回答 7名／参加 15名（回答率46.6%）

とても楽しんでいた	楽しんでいた	あまり楽しんでいなかった 楽しんでいなかった	わからない	満足度
4名	2名	0名	1名	85.7%

<お子さまの参加後の様子>

- 休日の余暇を有意義に使うことが増えた。
- 学校でも上達したと言ってもらい、今まで以上に楽しめるようになった。

Q. ご家族（保護者様＝回答者様）にとって満足いただけましたか

(1) 中高生パラスポーツクラブ（しあわせの村会場）

回答 26名／参加 37名（回答率70.2%）

大変満足した	満足した	あまり満足していない	満足していない	満足度
20名	6名	0名	0名	100%

<満足だったこと>

- 送迎があつて安全に楽しく友だちと活動できたこと、とても満足です。
- 学校の外に出て、学校のお友達と共に未経験だったスポーツを体験する機会を与えていただき感謝！
- 様々な事情で障害児が運動へ取り組む機会が少ない中、放課後の実施、送迎あり、専門スタッフによる指導といった理想的な環境において参加することができてとても満足しています。何より本人が楽しんで参加していたことが印象的でした。
- 学校へのお迎えがあつた事がとても有り難かったです。親が一旦 間に入ってしまうと「しんどいから行きたくない。」となる事が多いので助かりました。

ダンスも学校で踊った事があるものがあったり、同じ学校のお友達も一緒にあまり緊張せずに行けた様です。

- ・放課後、同世代の子と過ごす事があまりないので本人もとても有意義な時間を過ごす事ができ、とても嬉しそうにしていた。
- ・支援学校では、部活動もそれほど回数もないので、放課後の時間を持て余すことが多かったのですが、数回でも好きな卓球が、しかもしあわせの村の充実した設備でできて本人も喜んでいました。
- ・普段できないスポーツをできたこと。楽しく通えたこと。
- ・放課後を有意義に使うことができた。友達と同じ競技をすることでより楽しめたと思います。
- ・学校でもデイサービスでもないところに自分で通うことは自立を促すきっかけになったと思います。
- ・何より子供が楽しんでいたので満足です。

<満足できなかったこと>

- ・回数がもっとあればよいと思った。
- ・定期的にあればいいなと思う。
- ・間が開きすぎないように2週間に1回、月に1回などコンスタントである方がよい。ランダムな開催だと子どもが混乱しやすい。
- ・連絡帳などが無かったので、本人から様子を聞くしかなく、どんな事をしたかよくわからなかった。
- ・参加料の払込が銀行のみで面倒だった。

(2) 地域出前型スポーツパッケージ（モデル事業／支援学校会場）

回答23名／参加 29名（回答率79.3%）

大変満足した	満足した	あまり満足していない	満足していない	満足度
13名	9名	1名	0名	95.6%

<満足だったこと>

- ・とても楽しそうに帰って来ていました。お友達も出来るきっかけになれば良いかなと思っています。
- ・インストラクターの方や学校の友達と楽しくそれぞれのレベルにあわせたスポーツができる場所は貴重で、とても良い機会をいただいていると思います。
- ・障害があることで運動する機会が減ってしまうことを強く不満に思っていました。このようなプログラムの存在はとてもありがたい。
- ・ご時世の関係で部活動が無く、このまま無いままに卒業かなと思っていたところへ、このような機会がありました。
- ・体を動かす習慣をつけるには習い事が手取り早いですが、学校でしていただけるとお友達もいて楽しいだろうし、安心して参加させることができました。
- ・中学校が地域の中学校だったので、部活に所属していました。支援校には部活がないので、放課後に集まって何かをして、直通バスではなく巡回バス（地域のバス）に乗って帰るのが新鮮で楽しかったようです。
- ・子供が楽しそうに参加出来ていた。放課後に体を思い切り動かす事が出来た。通い慣れた学校での活動だったので、去年よりすんなり参加出来た。
- ・運動の機会が減っていたので、体を動かすことが出来て良かったです。

<満足できなかったこと>

- ・5回で終わってしまうのは残念でした。
- ・活動の様子を簡単にいいからメールなどで教えてもらえれば、家庭でももっと話ができる。
- ・簡単な活動記録、本人の様子やコメント等、家庭とやりとりできる冊子のようなものが欲しかった。
- ・送迎がないことが大変だった。

(3) ウィークエンドスポーツクラブ（しあわせの村会場）

回答 7名／参加 15名（回答率46.6%）

大変満足した	満足した	あまり満足していない	満足していない	満足度
4名	2名	1名	0名	85.7%

<満足だったこと>

- ・楽しく運動できて良かったです。
- ・技術的なことをコーチに教えてもらい、ゲームなどを通して楽しむこともできた。両方をしてもらえたのは、ありがたかった
- ・一人で会場（しあわせの村）まで行くこともあったが、それを嫌がらず助かりました。
- ・休日＝ゲーム、動画だったのが、パラスポーツに通うことでそれらの時間を減らせた。

<満足できなかったこと>

- ・まだ続けさせたかった。
- ・支払いが銀行の窓口でしかできず不便だった。

3. 指導者の養成等 研修受講生の満足度

回答 9名／参加 13名（回答率69.2%）

・参加者の年齢分布

年 齢	18～25歳	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳	70歳以上
人 数	4名	0名	3名	1名	0名	4名	1名

・研修を知ったきっかけ

	1. チラシ	2. 村ホームページ	3. 知人・友人	4. その他
回答数	3名	0名	3名	3名

チラシ：大学、しあわせの村

その他：大学、パラスポーツ関係団体

(1) 満足度

講義①「アンガーマネジメント」

	1. とてもわかりやすかった	2. わかりやすかった	3. どちらでもない	4. わかりにくかった	5. その他
回答数	6名	2名	1名	0名	0名

講義②「特別支援学校運動部活動のマネジメント」

	1. とてもわかりやすかった	2. わかりやすかった	3. どちらでもない	4. わかりにくかった	5. その他
回答数	5名	4名	0名	0名	0名

実践に向けて（種目別打ち合わせ）

	1. 期待どおりだった	2. 期待したほどではなかった	3. よくなかった	4.その他
回答数	8名	1名	0名	0名

ウィークエンドスポーツクラブで実践

	1. 期待どおりだった	2. 期待したほどではなかった	3. よくなかった	4.その他
回答数	9名	0名	0名	0名

（２）参加の動機

- ・興味があった
- ・障がいのある子どもたちとの接し方を学びたかった
- ・障がい者スポーツの取組みとして
- ・社会人になって社会貢献をする機会がなく、自分が関わってきたスポーツを指導できるので参加した
- ・地域での障がいのある児童の活動の促進に興味があった
- ・障がいのある方とスポーツをしたことがきっかけ
- ・特別支援学校との関わりに参加したいから
- ・なかなか経験できる機会が少ないことで自分にとってよい経験になると思った

（３）参加者の感想など

- ・子どもが楽しむ姿に感動した。これからも参加したい。
- ・講義と実践でとてもよい機会になった。
- ・これをきっかけにウィークエンドスポーツクラブを手伝いに来たい。
- ・生徒にとっても指導者にとっても成長できるよい場であると感じた。
- ・距離感が難しいのではと不安な気持ちがあったが、実践になると思っていたより近い距離で教えることができた。
- ・子どもたちと接し、言葉のトーン、表情がわかってよかった。
- ・実践のみの研修が多い中、この事業をする意義や専門家の講義なども聴くことができてよかった。よく理解できた。

Ⅲ. 保護者アンケート調査および報告

1. アンケート調査の実施について

今後の事業の参考として、参加生徒の保護者に満足度と併せて下記調査項目についてアンケート調査を行った。

調査期間：参加プログラム終了～12月28日（回答期限）

■調査項目

- (1) 子どもが運動活動に参加する場合の活動回数
- (2) 指導者（コーチ）がいるスポーツ活動にお子様に参加する場合の参加費用（月額）
（※問1で選択した活動回数に対する費用として回答）
- (3) 運動活動1回あたりの時間
- (4) 活動をする曜日・時間帯（複数回答）
- (5) ふだんの余暇活動（複数回答）

2. 回答状況

- (1) 回答数：56名（対象者数 81名）回答率69.1%

(2) 調査結果

①子どもが運動活動に参加する場合の活動回数

希望する活動回数	(人)
週1回	34
2週間に1回	16
1か月に1回	1
その他	5
週2回（以上）	(3)
週3回	(1)
公立中と同じぐらい	(1)
合計	56

②指導者がいるスポーツ活動にお子様に参加する場合の参加費用（月額）

	1,000円	2,000円	3,000円	4,000円	5,000円	6,000円	7,000円	8,000円	9,000円	10,000円	計
週1回		4	8	10	7	2	1	1		1	34
2週間に1回		1	10	2	3						16
1か月に1回			1								1
その他											5
週2回（以上）			(2)		(1)						(3)
週3回			(1)								(1)
公立中と同じぐらい			(1)								(1)
合計		5	19	12	10	2	1	1		1	56

③運動活動 1 回あたりの時間

1 回あたり活動時間	(人)
1 時間程度	22
1 時間以上 2 時間未満	31
2 時間以上	1
その他	2
	56

(その他)

- ・ 2 時間させたいが下校時間を考えると 1 時間になってしまう。
- ・ 活動時間は様々なことを念頭に置いて考えるべきである。

④活動をする曜日・時間帯 *複数回答

活動曜日・時間帯	(人)
平日の放課後	46
土曜日の午前	15
土曜日の午後	12
日曜日の午前	7
日曜日の午後	3
その他	0
	83

⑤ふだんの余暇活動 *複数回答

余暇活動の内容	(人)
放課後デイサービス	33
教室（習い事）*1	23
教室以外のスポーツ活動 *2	6
その他	11
	73

* 1

ダンス、体操、プール（水泳）、卓球、陸上、乗馬、サッカー、スケート、野球、テニス、よさこい、和太鼓
ピアノ、音楽、そろばん、かきかた、書道、コミック、余暇活動（市主催）

* 2

家族とテニス、家で卓球、公園でボール運動、ランニング、ウォーキング、散歩、プール、バランスボールなどを使った運動

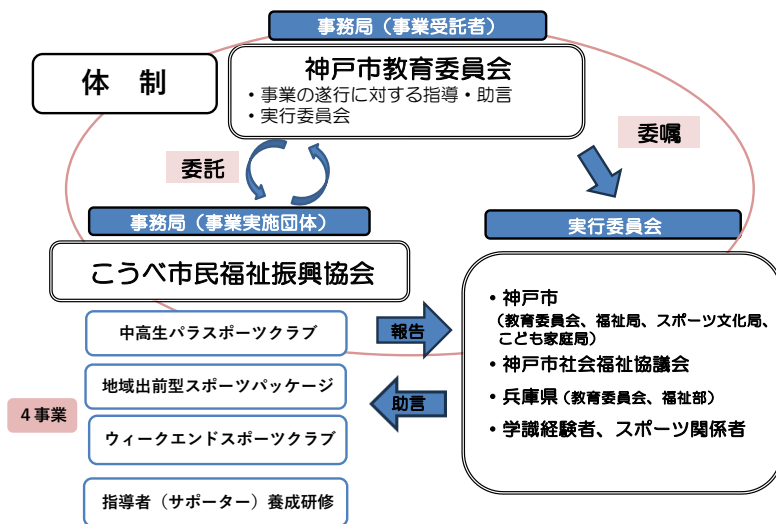
その他

ダラダラ過ごし動きたくない様子、家族で過ごす、外出、買い物、手伝い、ゲーム、テレビ、動画視聴、劇団レッスン、自宅で遊んでいる、折り紙、部活動（週 2 回）、個別学習支援

IV. まとめ

神戸市教育委員会や市立特別支援学校をはじめ、指導に協力いただいた事業者・団体の理解、協力のもと、予定していた事業を完了することができた。

1. 実施体制について



- ・神戸市教育委員会や障害者スポーツ関係団体等と連携しながら事業を実施した。
- ・立命館大学 教授 金山千広氏、神戸親和大学 准教授 宮辻和貴氏にアドバイザーとして事業に参画いただき、実施プログラムや養成研修の内容、受講対象者への広報など多岐にわたって助言をいただいた。
- ・金山氏には当事業において「当事者の形成的評価」の調査研究を行っていただいた。
- ・神戸市教職員OBにコーディネーターを委嘱した。支援学校との「参加生徒の情報共有」や「実施日程、学校施設の利用等の調整」では、学校側と事務局、双方の事情を理解した立場で関わることで、事業全体をより有効かつスムーズに進めることができた。また会場への移動や活動における参加者の安全配慮や指導側への助言等にもつなげることができた。
- ・運動指導者はしあわせの村共同事業体事業者の他、市内のNPO団体や競技団体など多様な方に参画いただいた。

＜指導者の感想＞

- ・徐々に周りを気遣う行動や声かけ、使う言葉自体にも変化が見られて、身体の変化のみならず、どうしたら相手の子と合わせられるか、お互いが気持ちよくできる場所はどのポイントなのか、生徒たち同士の“空気の変化”にも驚かされました。（灘さくら・青陽灘／ダンス）
- ・未経験者・経験者それぞれが参加していたので、課題内容を難しくせず、みんなができる内容に焦点を置くことで、生徒の方の達成度・満足度に繋がったのではないかと思います。課題に対して不安に思う生徒の方もいましたが、段階を重ねるにつれて上達していく姿が見られたのは、仲間の存在があったからチームワーク向上・自身のモチベーション向上に繋がったように思います。
- ・まずは楽しんでもらうことを1番に考えて実施しましたが、スポーツを通じて達成感や競争心など様々な感情を出してもらえたと思います。自分で目標をしっかりとち、出来ない事を出来るように努力する姿からはこちらが学ばせてもらうことが多くありました。（中高生パラスポーツクラブ／卓球、バドミントン、ダンス）

2. 実施内容について

- ・いつ開催するかについては、保護者アンケート調査では「平日の放課後」の回答が多かった。通っている支援学校を会場とすることで会場への移動時間分がなく、送迎の手配や費用などの負担も軽減できるため「支援学校会場」で「平日の放課後」に開催するメリットは大きい。
- ・活動時間については「1時間以上2時間未満」の回答が多かった。今回の活動時間は1時間で設定した。帰りの時間を考慮すると1時間程度が適当と思われる。
- ・活動の回数については「週1回」「2週間に1回」の順に回答が多かった。開催頻度は指導者の確保の問題、事務局による調整負担の増といった課題もある。無理なく継続していくには持続可能な仕組みの構築が必要となってくる。
- ・参加費用については、月額で3,000円、4,000円、5,000円の回答が多く、1回あたりに換算すると1,000円～2,000円が多かった。今回は5回 2,500円、1回500円であったため、もう少し負担してもよいと考えている保護者が多いと思われるが、今後継続して実施する場合は生活困窮世帯への対応策の検討が必要となる。
- ・ウィークエンドスポーツクラブは、予想したほど参加者数が伸びず、放課後の開催と比較しても少なかったことから、特別支援学校の運動部活動は週末より放課後の開催が適当と思われる。一方、ウィークエンドスポーツクラブには、特別支援学級在籍の参加者が15人中6人と3分の1以上を占めた。市立中学校における特別支援学級の生徒の部活動への参加状況などを調査したうえでニーズがある場合には運動提供機会についての検討が求められる。

3. 特別支援学校や保護者との連携について

- ・特別支援学校を会場に開催する場合は、各学校の理解や協力を得るとともに、事業実施サイドにおいては最近の教員の働き方改革などへの理解が求められる。今回は会場設営から片付けまですべて委託事業者側で対応し、教員にはほとんど負担をかけずに開催できた。
- ・保護者アンケート調査では「活動時の動画提供」「連絡帳等による活動内容の共有」などの要望の記載もみられた。事業の実施目的に照らし、また、事業継続を可能とするため事務局負担の軽減も考慮しつつ、保護者の要望にどこまで対応するのが適切かについて慎重な議論が必要である。
- ・一方、参加生徒によっては前日や登校前の様子が放課後まで影響するものもあり、活動に来たものの運動に参加できないといったこともありえる。保護者から事前に配慮すべきことなどの情報が得られると、スムーズに活動につなげやすい点から、活動上必要な生徒の情報を得る連絡方法について検討は必要である。

4. 地域連携・地域移行について

- ・今回、地域で活動する NPO 法人や競技団体にも指導を依頼した。地域において障害者への運動提供について理解ある団体が増えることが期待される。
- ・指導に参加した団体の多くは障害者への運動指導経験があったが、初めての団体においても、当初は指導者の指示どおりに運動ができる生徒に集中しやすい傾向がみられたが、回数を重ねるなかで指導者側の変化が見られ、生徒が競技を楽しめる工夫がされていった。
- ・地域連携や地域移行にあたっては、指導者の障害理解は重要であると改めて認識された。指導者等の養成の講座に参加されたような関心の高い支援者をどう育て、活動参加につなげていくか、その仕組みづくりも重要になってくる。

参考資料

- * 1 「参加者による形成的評価」 立命館大学産業社会学部教授 金山千広
- * 2 保護者アンケート調査 アンケート用紙
- * 3 運動指導における工夫

特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業
中高生パラスポーツクラブ参加者による形成的評価

立命館大学 金山千広

1. はじめに

2011 年に施行されたスポーツ基本法は、スポーツは世界共通の文化であるとし、全ての人のスポーツ権を謳っている。また、スポーツの持つ人格形成への好影響に触れ、身体的、精神的、社会観点から、次世代を担う青少年に対する重要性に触れている。このスポーツ基本法は、「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」という障害者のスポーツ推進について初めて明記した法律である。

しかしながら、障害者のスポーツ実施率は、障害の無い人のスポーツ実施率よりも低く、特に 10 代（7-19 歳）の週 1 回以上のスポーツ実施率が、障害の無い人 64.1%（スポーツ庁, 2021）、障害のある人 41.8%（スポーツ庁, 2022）と 20%以上の開きがある。2023 年 5 月の報告では、35.3%（前年度から 6.5 ポイント減）、年 1 回以上では 64.0%（前年度から 9.1 ポイント減）、週 3 回以上では 16.1%（前年度から 2.8 ポイント減）となった。

10 代の青少年のスポーツ環境としては、学校運動部活動がある。通常校に通う中高生において運動部活動は普及が進んでおり、生徒にとっての様々なメリットが報告されてきた。学校運動部活動は 2010 年に学校の教育課程に準ずる活動（学校教育活動の一環）、教員等の指導の下で、生徒が自発的・自主的にスポーツを行う機会として位置付けられた。運動部活動の在り方については、教師の働き方改革等を含めて、学校の運動部活動を持続可能な活動とするために、2018 年にスポーツ庁が総合的なガイドラインを策定している。以降、2019 年度・2020 年度には、中央教育審議会や国会から、学校における働き方改革などの観点を含め、部活動を学校単位から地域単位の取組とするべきことが指摘された。この流れに伴い、スポーツ庁は 2023 年度以降、休日の部活動の段階的な地域移行を図っている。

その一方で、特別支援学校の運動部活動の実施状況や、部活動に実態についての研究は、十分に展開されているとは言えない（阿部・村山, 2018）。実際、特別支援学校における運動部活動・クラブ活動が行われている学校は、高等部で 58.6%、中学部で 37.2%（2016, スポーツ庁）であり、「中体連」「高体連」というような全国的な組織も整備されていない現状がある（2015, スポーツ庁）。

以上の状況を踏まえつつ、スポーツ庁では 2023 年 5 月に「令和 5 年度障害者スポーツ推進プロジェクト（特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業）」を公募した。本稿では、この事業に採択された神戸市教育委員会の取り組みである「中高生パラスポーツクラブ」を取り上げ、参加者の評価の観点から特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業のモデルを検討する。

2. 令和 5 年度障害者スポーツ推進プロジェクト(特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業)について

成人一般に比べて障害者のスポーツ実施状況が低調であることから、障害者のスポーツ

実施率を向上させるためには、障害者特有のスポーツの実施に係る障壁の解消と、スポーツ施策の実施体制上の課題の解消を図ることが重要である。そのためには、2022年に報告された障害者スポーツ振興方策に関する検討チーム報告書（高橋プラン）に記されているように、障害の有無を超えて一緒にスポーツをするようなユニバーサル、インクルーシブなスポーツ環境の整備がすることが必要になる。これらを背景に、令和5年度障害者スポーツ推進プロジェクト（特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業）は、障害者が生涯にわたってスポーツを実施するための基盤を整備する観点から、特別支援学校の児童生徒がスポーツ活動に継続して親しむことができる機会を確保するため、特別支援学校を拠点とするクラブチーム、総合型地域スポーツクラブ、社会福祉施設等にスポーツ活動ができる環境を整備し、児童生徒本人の希望に合わせて活動を継続できる地域連携・移行モデルを構築することを目的としている（スポーツ庁、2023）。

3. 神戸市教育委員会の取り組み

神戸市立特別支援学校は、神戸盲学校、青陽灘高等支援学校、友生支援学校、灘さくら支援学校、青陽須磨支援学校、いぶき明生支援学校の6校がある。神戸市教育委員会は、令和5年度障害者スポーツ推進プロジェクト（特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業）に採択された。本事業は、神戸市教育委員会からこうべ市民福祉振興協会に再委託された。中高生パラスポーツクラブは、スポーツ種目（活動へのアクセスを含む）に自力で参加できる知的障害のある生徒を対象として、以下の事業が行われた。

事業①「障害者に配慮されたスポーツ施設における放課後の運動の機会の提供」

放課後に神戸市内の拠点運動施設（しあわせの村）まで送迎し、運動機会を提供する。

事業②「地域出前型スポーツパッケージ（モデル事業）」

特別支援学校の運動部活動の地域実施に向けた新規モデル事業として実施。地域移行を進める上での課題を把握し解決策を探り、パッケージの改良を検討して次年度以降の実施につなぐ。

事業③「ウィークエンドスポーツクラブ」

週末の運動の機会の提供、事業を実施する中で、放課後開催との比較、運動ニーズの把握、週末地域展開に向けた課題把握を行う。

表1「事業の概要」

項目	事業①	事業②	事業③
対象	友生支援学校・青陽須磨支援学校・神戸大学附属特別支援学校	灘さくら支援学校&青陽灘高等支援学校、いぶき明生支援学校	神戸市内在住の特別支援学校（県立等含む）や特別支援学級、通級指導教室利用の中高生
会場	しあわせの村運動施設	灘さくら支援学校、いぶき明生支援学校（各学校）の運動施設	しあわせの村運動施設
定員	1校あたり20名以内	1校あたり20名以内	30名
実施回数	1校あたり5回	1校あたり5回	全6回
実施種目	卓球、ダンス、テニス	卓球、ダンス、バドミントン	卓球、ダンス、陸上
利用者負担	計2,500円	計2,500円	計3,000円

4. 中高生パラスポーツクラブの形成的評価

スポーツ指導者自身の考えを一方的にプレーヤーに伝えるのではなく、気づきを促し成長に導いていく、プレーヤーの学びに対する主体的な取り組みを支援するコーチングを目指している。したがって、参加するプレーヤー(当事者)による、事業評価は、非常に重要である。総括的な評価に関するものとして、小林(1978)は「体育授業診断法(態度測定尺度)」を開発しており、また、梅野・辻野(1982)は、小林の評価法に基づき、小学校低学年の児童を対象に、態度評価による授業診断法を作成している。さらに、高橋・鐘ヶ江(1986)らは、小林の評価法は授業全体の成否を総合的に判断するうえでは有効であるが、その成否の原因を具体的に理解することが困難であるとしている。

形成的評価として、各時間の実践を形成的に評価し、当初の計画を修正することや、おのおのの学びの実態を把握することは事業成果を高めるうえで極めて重要である。運動を継続するには、運動自体の楽しさの認知に基づく内発的動機づけが重要である(岡澤, 2005)。スポーツにおける内発的動機づけは、「有能さと自己決定」であると定義されている。また、内発的動機づけは、運動有能感の高まりによって強化される(杉原, 1995; 岡澤, 1996)。したがって、本稿では、岡澤らの意見を参考に、長谷川・高橋の小学校における形成的評価尺度を援用して、中高生パラスポーツクラブに参加した生徒の主観的な評価の観点から、事業評価を行うこととした。

5. 方法

調査は、毎回の活動後に無記名で実施した。長谷川・高橋(1995)の小学校体育授業の形成的評価表では、技能の上達の自覚を含む「成果」、達成感や充実感を示す「意欲・関心」、主体的な「めあて」を持って、学びを促進する「学び方」、周囲との協力を示す「協力」の4つで構造化され、合計で9つの質問項目を持つ。本調査では、知的障害のある回答者への配慮から長谷川・高橋(1995)、9つの質問項目のうち「成果」に関する心情の概念的表現の二つを抜いた7項目を選択した。各質問項目への回答方法は、表情マークを用いて「はい」「まあまあ」「いいえ」の3段階とし、「はい」

表2 形成的評価の調査票

1. いままでできなかったうん	は い	まあまあ	いいえ
どうが、できるようになった	😊	😐	😞
2. しぶんからすすんでうんと	は い	まあまあ	いいえ
うできた	😊	😐	😞
3. いっぱいれんしゅうした	は い	まあまあ	いいえ
	😊	😐	😞
4. ともだちとなかよくできた	は い	まあまあ	いいえ
	😊	😐	😞
5. コーチといっしょにできた	は い	まあまあ	いいえ
	😊	😐	😞
6. たのしかった	は い	まあまあ	いいえ
	😊	😐	😞
7. せいっぱい、ぜんりよく	は い	まあまあ	いいえ
でうんどうした	😊	😐	😞

に3点、「まあまあ」に2点、「いいえ」に1点を与えた。調査票の質問項目を表1に示す。調査票は、「成果」1項目、「学び方」2項目、「協力」2項目、「関心・意欲」2項目で構成された。各概念の質問項目数が異なることから、分析は概念ごとに合計点を算出したものを標準得点に換算し、関連要因の比較検討に用いた。分析には IBM SPSS Statistics26.0を使用した。

回答者数の内訳を表3に示した。学校別内訳は須磨 n=36、いぶき明生 n=71、灘さくら青陽 n=61、友生 n=57、神戸大附属 n=71、ウィークエンドスポーツクラブ (WE) n=68 の合計 364 である (調査票記載の状況に鑑み、各質問の回答数は異なる)。

6. 結果及び考察

ここでは、結果及び考察を整理する。集約の便宜上箇条書きとした。

6.1 回数にみた形成的評価の合計点の推移

6.1 形成的評価の推移

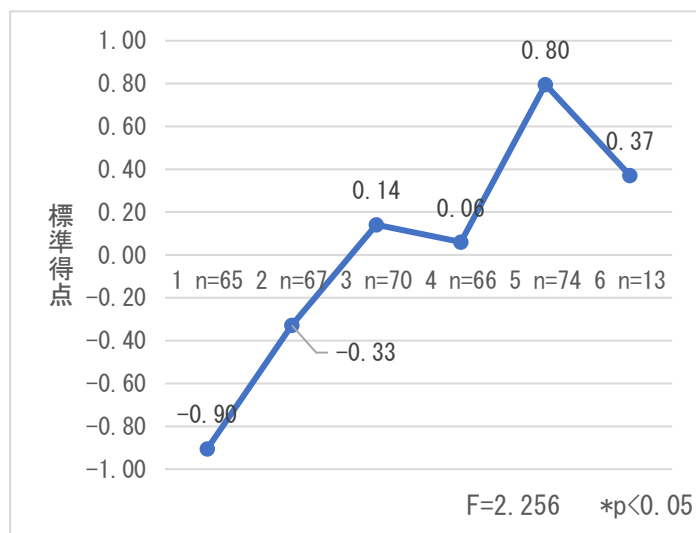


図1 形成的評価の合計点の推移

図1は本調査で用いた形成的評価項目の合計点の推移を示す。

- 形成的評価は事業回数を重ねるごとに上がっていくことが好ましい第1回目から第5回目まで得点が伸びている ($f=2.956$ $p<0.05$)。参加した生徒は、それぞれのスポーツの種目特性に触れている様子である。本事業が概ね良好に評価されたことを示す結果となった。なお、第6回目はウィークエンド教室のみ実施した。

6.2 回数にみた形成的評価の要因別推移

図2（次頁）は、形成的評価の要因別にみた推移を示す。

- 第5回目はいずれの要素も上がっている。特に技能の上達の自覚を含む「成果」が有意に上昇している ($f=2.954$ $p<0.05$)。技能の向上は、スポーツの内発的動機づけに影響するが、知的障害のある生徒が自覚し難い項目である。成果の自覚は、本事業が彼らの生涯スポーツに向けた取り組みの一助につながる可能性が高いことを示す。
- 生徒は事業への「意欲・関心」は、相対的に差を認めていない。このことは生徒たちが初回から「楽しかった、一生懸命に取り組んだ」と知覚する傾向にあったことを示している。また、生徒が各自の興味ある種目を選択していることを鑑みると、初回から種目の競技特性に触れていると捉えることも考えられる。
- 統計的に有意でなかったが ($f=1.192$ $p=0.089$)、友達やコーチと一緒に運動できたという「協力」が3回目以降上昇している。
- 「自分から進んで練習した」自主性を示す学び方は回を追うごとに上昇している。

表3 回答者数の内訳

項目		度数	(%)
学校名	須磨	36	9.9
	いぶき明生	71	19.5
	灘さくら青陽	61	16.8
	友生	57	15.7
	神戸大附属	71	19.5
	ウィークエンド	68	18.7
	計	364	100.0
回数	1	69	19.0
	2	69	19.0
	3	72	19.8
	4	67	18.4
	5	74	20.3
	6	13	3.6
	計	364	100.0
種目	テニス	37	9.9
	バドミントン	26	7.1
	陸上	16	4.4
	ダンス	156	43.1
	卓球	129	35.4
	計	364	100.0

- 特別な配慮を伴う生徒の立場から実証的に検討された形成的評価の方法は確立していない。しかし、回数別推移の観点から見てみると、本調査で使用した形成的評価の調査項目は、参加当事者による事業評価の指標として一定の貢献ができると判断した。

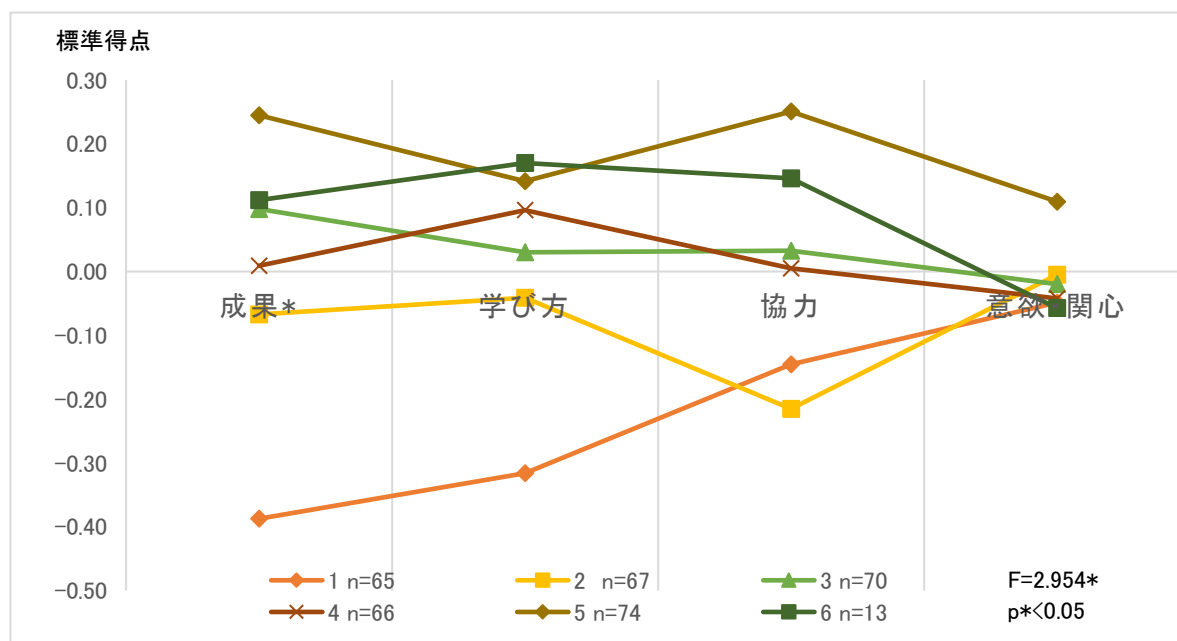


図2 回数別にみた形成的評価の特徴

6.3 学校別にみた形成的評価の特徴

参加した学校別の形成的評価の特徴を把握した。図3、図4（次頁）に結果を示す。

- しあわせの村を会場とした神大附属は、他校と比較して「協力」が有意に高くなっている ($f=2.564$ $P<0.05$)。技術力を示す「成果」、主体性を示す「学び方」も高い。
- 神大附属と同じく、しあわせの村を会場とした須磨は、技能向上を含む「成果」の評価が高く、楽しかった、一生懸命に取り組んだという「意欲・関心」が高い。楽しさの経験や一生懸命に打ち込んだ経験、技術の向上の認知は、生涯スポーツにつながる要因である。一方で「協力」が低くなっている。参加者の特徴かもしれない。
- 友生の評価が全体的に低いことが気になる。
- 出前型事業において、灘さくら青陽は、積極性を示す「学び方」が平均値に近く、他の3項目はいずれも平均よりもやや高い傾向にある。灘さくら青陽は、2022年度の中高生パラスポーツクラブの報告においても4項目すべてが高い傾向にあった。実施環境に加えて、生徒を囲む状況等も興味深い。
- いぶき明生は、「協力」が低く、須磨と同傾向を示し、灘さくら青陽とは異なる傾向をしている。ここでも事業に参加した生徒の状況が関与しているように考える。
- 友生以外は、スポーツの技術向上の認知に関する「成果」が高い傾向にある。スポーツ種目の専門コーチが指導に当たることで、生徒は「上手になった」と知覚している様子である。技術の向上は運動有能感・自己肯定感に直接かかわる要因である。
- ウィークエンドスポーツクラブ (WE) の評価は相対的に高いが、積極性を示す「学び方」が特に高い。WEは、複数校の混合メンバーで構成される。WEに積極的に参加する

ことにより、新しい環境で週末を充実して過ごしている様子である。

- 総じて、提供の順番を含む学校特性や参加種目及び日常的なスポーツの経験毎に違いはあるものの、参加した生徒の主観によって判断される形成的評価を通しては、本事業のスポーツの展開が、事業目標である「スポーツ種目を経験することにより、生徒自身の卒業後の運動習慣や余暇活動の向上」に寄与する可能性を示唆した。

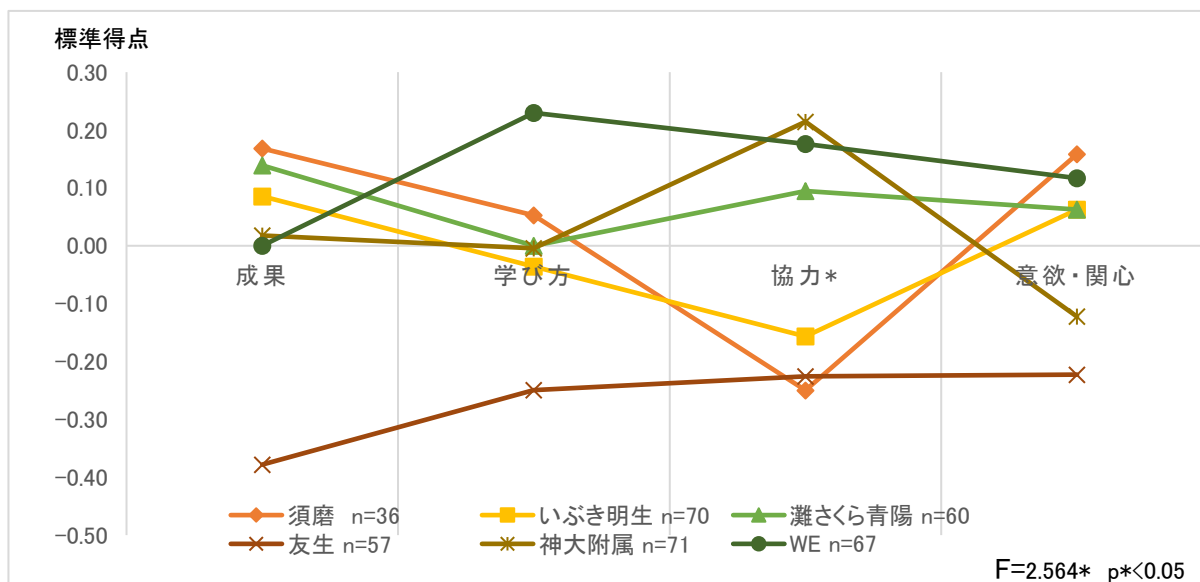
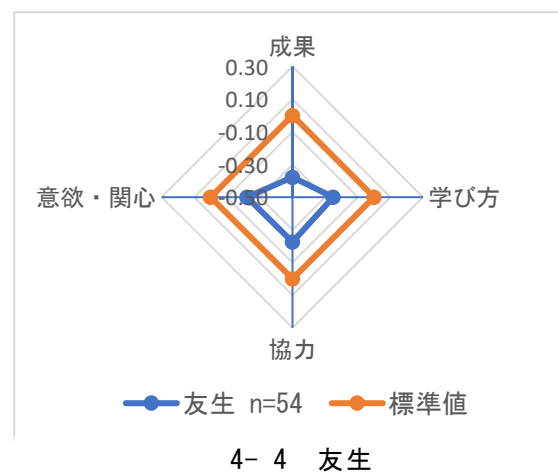
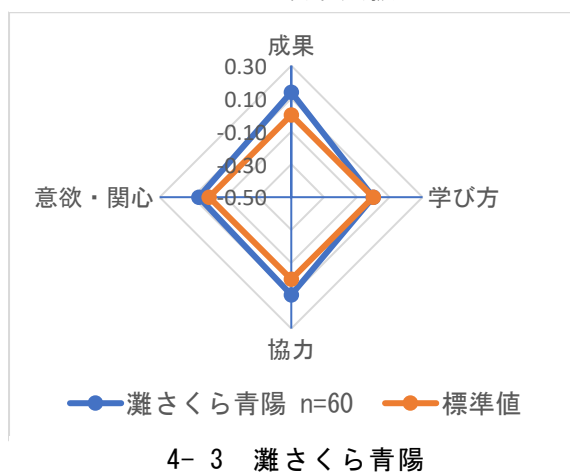
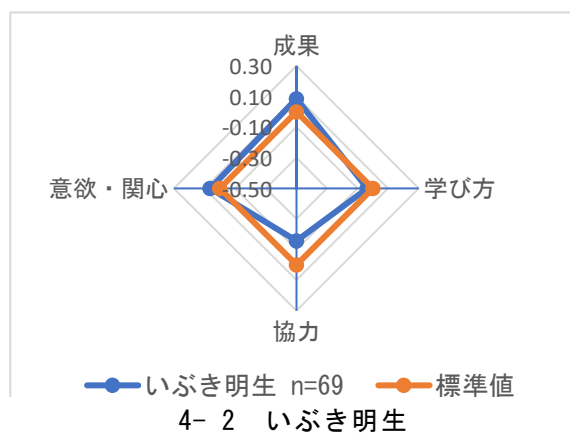
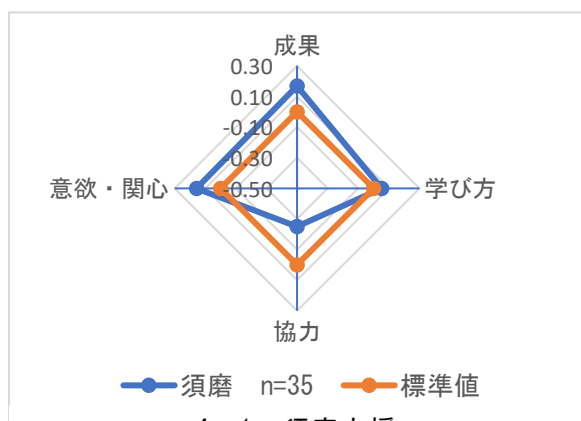
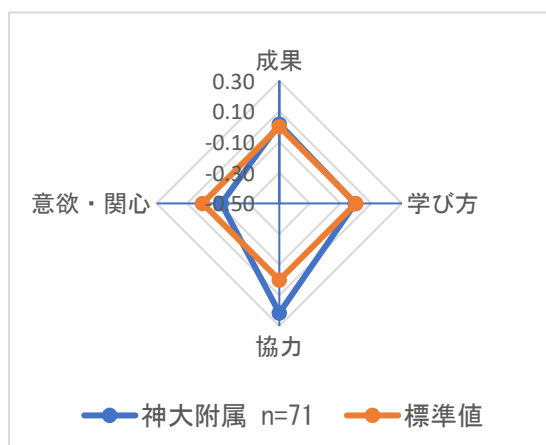
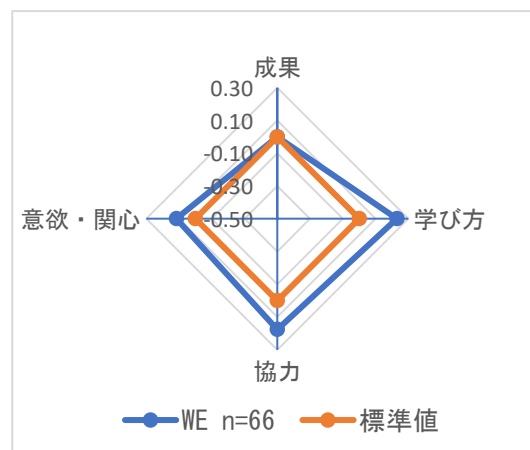


図 3 学校別にみた形成的評価の特徴：全体比較





4- 5 神戸大付属



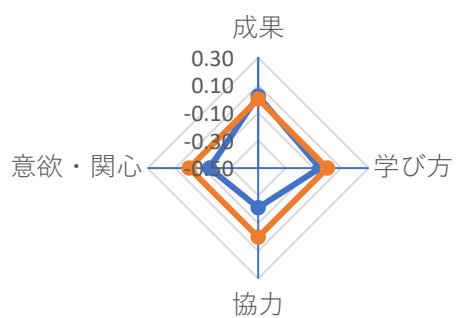
4- 6 ウィークエンドスポーツクラブ

図 4 学校別にみた形成的評価の特徴：学校別特徴の把握

6.4 開催場所及び種目別にみた形成的評価の特徴

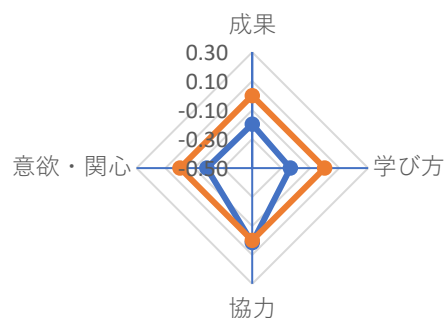
開催場所及び種目別に参加生徒の形成的評価の特徴を把握した（次頁図 5・図 6 参照）。情報が多く図表が煩雑であることから開催環境（場所、部活及びウィークエンドスポーツクラブ）と種目特性を考慮して、各活動別に形成的評価を把握した。

- 統計的有意差は見られないが、運動技術の向上の自覚を示す「成果」は、しあわせの村で実施しているダンスとウィークエンドスポーツクラブ（WE）の卓球が低い傾向にある。ただし、WE の卓球は、積極的なかわりをする「学び方」が高く、「協力」「関心意欲」も高い。益子（2012）は、教師が表出する表情がクラスの雰囲気の良い印象を与えることを報告している。結果は、技術的な面よりも週末活動のクラスの雰囲気が参加者に評価されているのかもしれない。
- ダンスや陸上は形成的評価が向上し難い種目である（長谷川・高橋，1995）。高橋ら（1994）は、ボール運動（当時）の得点が高く、陸上運動の得点が低くなる傾向を報告している。統計的有意差を認めた「学び方」（ $f=2.483$ $P<0.05$ ）は、ウィークエンドスポーツクラブの陸上と卓球、及び学校で行われている卓球が高い。卓球は知的障害者の特性に適応的な種目である。したがって、授業で取り入れている学校が多い。今回、生徒が技術の向上を自覚していることは生涯スポーツにつながる要因である。
- 高橋ら（1995）は、陸上競技の「成果」「意欲・関心」が低く、「協力」は、陸上運動と表現運動（ダンス）で低い傾向にあることを報告している。ウィークエンドスポーツクラブの実施では、「成果」が高い。しかし、今回の結果では、これまでできなかった運動ができるようになったという「成果」が高い。運動目的を「自我志向性：周囲と比較すること」よりも「目標志向性：個人がどのようなプロセスを重視するか」を尊重するコーチングがあったのかもしれない。
- 開催別特徴では、日本スポーツ協会のスポーツ種目指導者の評価が高い。学校別に多少のばらつきがあるものの卓球の形成的評価はいずれも高い。また、ダンスについては、ウィークエンドスポーツクラブの形成的評価が高い。結果から、ウィークエンドスポーツクラブは生涯スポーツを踏まえた余暇活動の一助を担うことが示唆された。



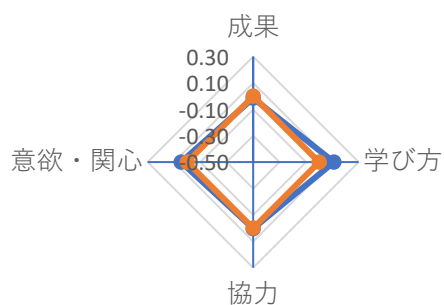
● 村テニス n=36 ● 標準値

5- 1 しあわせの村：テニス



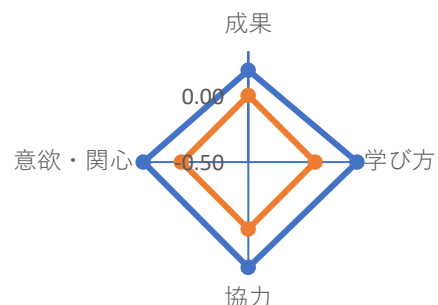
● 村ダンス n=72 ● 標準値

5- 2 しあわせの村：ダンス



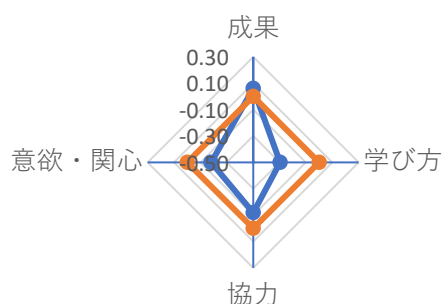
● 村卓球 n=56 ● 標準値

5- 3 しあわせの村：卓球



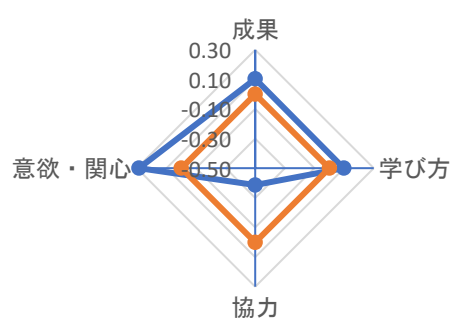
● 学卓球 n=42 ● 標準値

5-4 特別支援学校：卓球



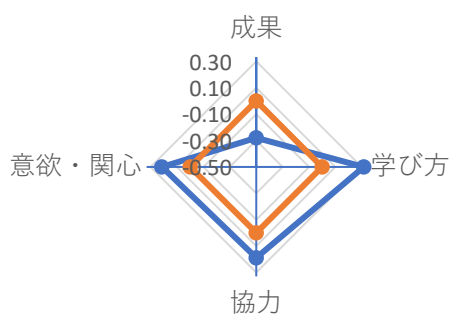
● 学校ダンス n=62 ● 標準値

5-5 特別支援学校：ダンス



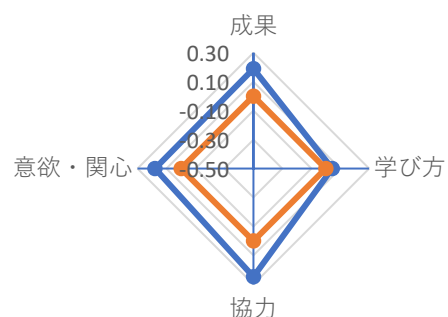
● 学校バド n=26 ● 標準値

5-6 特別支援学校：バドミントン



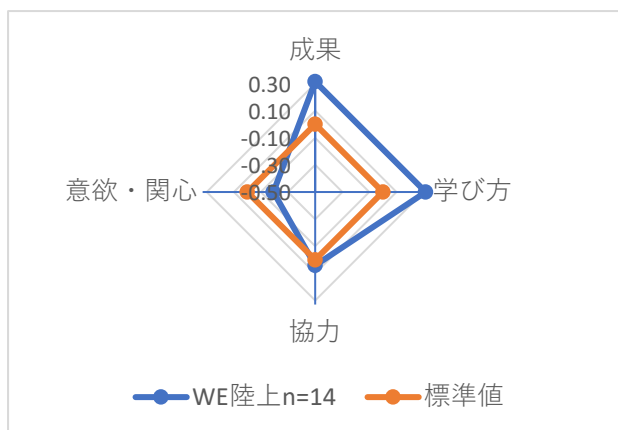
● WE卓球 n=31 ● 標準値

5-7 ウィークエンドスポーツクラブ：卓球



● WEダンス n=21 ● 標準値

5-8 ウィークエンドスポーツクラブ：ダンス



5-6 ウィークエンドスポーツクラブ：陸上

図 5 開催場所及び種目別にみた形成的評価の特徴：種目・場所の特徴の把握

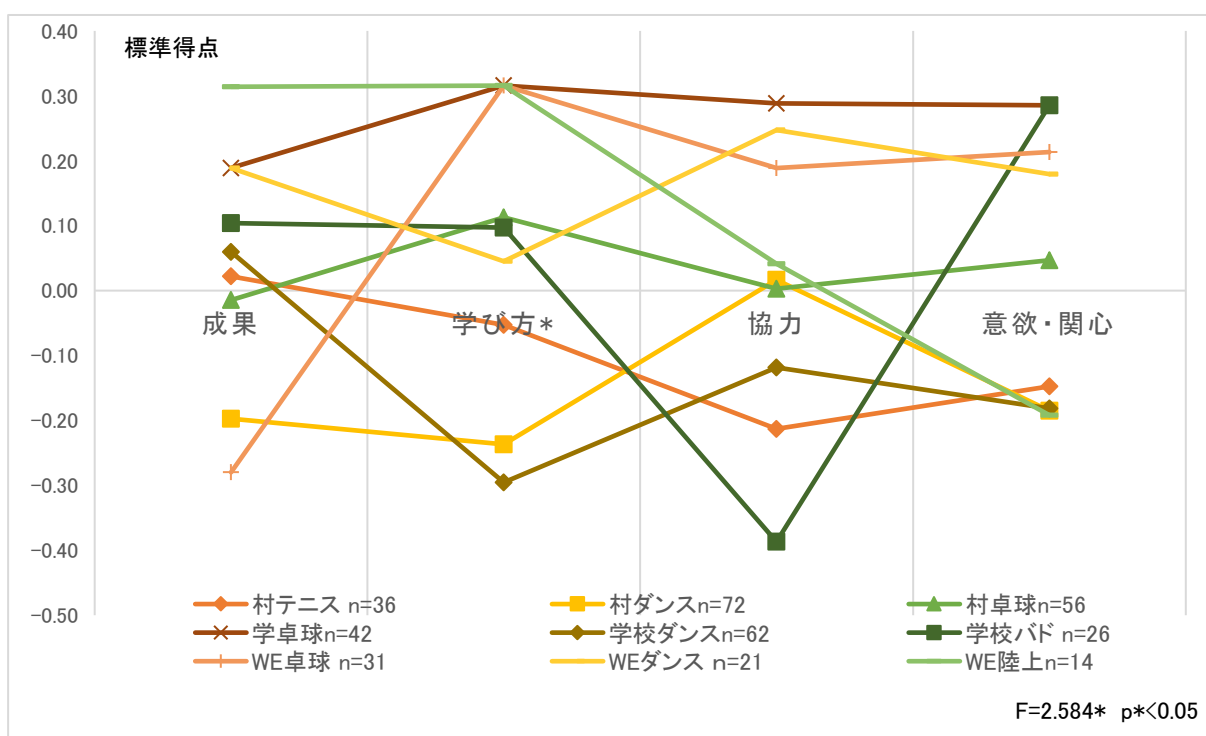


図 6 開催場所及び種目別にみた形成的評価の特徴

7. まとめ

事業評価の一端として、中高生パラスポーツクラブの参加者による形成的評価を明らかにした。以下に 2023 年度の神戸市立特別支援学校の児童生徒数の抜粋を示す。小学部、中学部、高等部のそれぞれの合計数値を見てみると、特別な配慮を要する生徒は、中学、高校で通常校から特別支援学校に移行するケースが多いことを予想する。その中には通常校での体育授業や運動部活動を経験した生徒も存在している。そのような背景を持つ生徒のスポーツの機会を保障するうえでも、スポーツ種目の特性に触れる今回の取り組みは有意義であると考えている。

表 4 2023 年現在の神戸市立特別支援学校の児童・生徒数

	児 童 ・ 生 徒 数						
	計	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
前年5月	1,183	350	305	353	45	64	66
計	1,252	407	353	304	69	54	65
小	359	60	68	43	69	54	65
中	384	157	110	117	0	0	0
高(本)	497	180	173	144	0	0	0
高(専)	11	9	2	0	0	0	0

知的障害のある人は外的環境の変化への対応が要求されるオープンスキル（球技）には課題を伴う。高橋ら（1994）の通常学校を対象とした形成的評価に関する報告では、ボール運動（当時）の得点が高く、陸上運動や表現運動の得点が低くなる傾向を報告している。本事業の形成的評価でもテニス、バドミントン、卓球といったオープンスキルの評価が高く、通常校と同様の傾向を示した。学校別参加者の状況にもよるが、背景には中等部、高等部から特別支援学校に移行した生徒の存在を予想する。2022 年度の事業における形成的評価では、技能を含む「成果」の注目が高かったが、2023 年度は開催場所及び種目別の特徴を把握したところ、「成果」に加えて、積極性を示す「学び方」や楽しさの共有を示す「意欲・感心」に特徴的な評価を得ている取り組みも存在した。

運動部活動の意義・効果としては、今宿ら（2019）が、学校適応（学校生活の充実、人間関係の構築、友情の形成）、心理社会的発達（社会性、民主的な態度、豊かな心、生きる力、リーダーシップ、21 世紀型能力、忍耐力・精神力、自己の確立）、ストレス・精神健康（エネルギーの発散、ストレス・プレッシャー）、身体の発育発達（スポーツを味わい、楽しむことのできる技術・能力、体力・運動能力の発達、健やかな体）、スポーツの価値意識（フェアプレイ）をあげている。

本事業は、競技種目のコーチ資格を有する指導者が担当している。また、本事業の受講者のように、種目特性にある程度対応できる生徒は、スポーツに必要なハードウェアやヒューマンウェアの状況に伴い、種目特性を生かしたオープンスキルを楽しむことができている。今宿ら（2019）が報告する運動部活動の意義や効果を醸成する一助になる可能性が高い。

参考文献

- 阿部里彩子，村山拓（2018）特別支援学校における運動部活動の活動状況：東京都立特別支援学校への質問紙調査から．東京学芸大学紀要．総合教育科学系 69(2):139-150.
- 長谷川悦示，高橋建夫，浦井孝夫（1995）小学校体育授業の形成的評価表及び診断基準の作成の試み．スポーツ教育学研究 14（2）:29-37
- 高橋建夫，長谷川悦示，刈谷三郎（1994）体育授業の「形成的評価法」作成の試み：子どもの授業評価の構造に着目して．体育学研究 39：29-37
- 今宿 裕，朝倉雅史，作野誠一，嶋崎雅規（2019）学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題．体育学研究 64(1):1-20
- 益子行弘，齋藤美穂（2012）教師の表情とクラス雰囲気との関連性の検討．日本感性工学

会論文誌 11(3):483-490

文部科学省, (2011) スポーツ基本法(平成 23 年法律第 78 号)(条文).

岡澤祥訓, 深見英一郎(2018) 運動部活動の「形成的評価法」作成の試み: 生徒の部活動
評価の構造に着目し て. スポーツ教育学研究 37(2): 47-6

中高生パラスポーツクラブアンケート（保護者様向け）

パソコン用 URL : <https://ws.formzu.net/fgen/S719704432/>

スマホ用 URL : <https://ws.formzu.net/sfgen/S719704432/>



Q 1. 今回のプログラムに参加したきっかけを教えてください（あてはまるもの全てに✓）

1. 子どもが希望した
2. 保護者が希望した
3. 友達から誘われた
4. その他（ ）

Q 2. 参加しようと思った理由を教えてください（あてはまるもの全てに✓）

1. 運動をするよい機会だから
2. { 学校（復路は拠点地）～会場の専用バス送迎があったから
会場が通学している（または近くの）支援学校だったから
会場（しあわせの村）が通いやすかったから
3. 専門のスタッフが指導してくれるから
4. 放課後の時間を有効に使えるから
5. その他（ ）

Q 3. 今回のプログラムに参加して、お子さまは楽しまれていましたか？

あてはまるもの1つに✓をつけてください。

1. とても楽しんでいたようだ
2. 楽しんでいたようだ
3. あまり楽しんでいなかったようだ
4. 楽しんでいなかったようだ
5. わからない

Q 4. 今回のプログラムに参加して、「家で運動をするようになった」「プログラムのことを家で話す」などお子さまの様子に変化がありましたら、自由にお書きください。

--

Q 5. 今回のプログラムは、ご家族（保護者様＝ご回答者）にとって満足いただけましたか？

1. とても満足している
2. 満足している
3. あまり満足していない
4. 満足していない

Q 6. ご家族（保護者様＝ご回答者）にご満足いただけたこと、ご満足いただけなかったことについて、自由にお書きください。

満足したこと	
満足できなかったこと	

Q 7. 「中高生パラスポーツクラブ」は令和 5 年度スポーツ庁「障害者スポーツ推進プロジェクト（特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業）」として実施しました。

以下の質問はスポーツ庁・文化庁の方針として示されている「部活動の地域移行」に向けた統計調査としておたずねします。

（１）お子さまが運動活動に参加する場合、活動の回数はどのぐらいが望ましいですか？

あてはまるもの 1 つを選んでください。

1. 週 1 回程度
2. 2 週間に 1 回程度（月 2 回程度）
3. 1 か月に 1 回程度
4. その他（具体的に ）

（２）運動活動の 1 回あたりの時間は、どのぐらいが望ましいですか？

あてはまるもの 1 つを選んでください。

1. 1 時間程度
2. 1 時間以上 2 時間未満
3. 2 時間以上
4. その他（具体的に ）

（３）活動をする日・時間帯はいつが望ましいですか？

あてはまるもの全てを選んでください。

1. 平日の放課後
2. 土曜日の午前
3. 土曜日の午後
4. 日曜日の午前
5. 日曜日の午後
6. その他（具体的に ）

（４）ふだんの余暇活動について教えてください。

例：放課後等デイサービスの利用

スポーツ教室の利用（種目（例）ダンス）

回答：_____

（５）指導者（コーチ）がいるスポーツ活動にお子様が参加する場合、参加費等（月額）はいくらまで負担しようと思えますか？

※（１）で回答いただいた活動頻度に伴う 1 か月分の費用として、あてはまるものを 1 つを選んでください。

- | | | |
|------------|--------------|----------------|
| 1. 1,000 円 | 8. 8,000 円 | 15. 15,000 円以上 |
| 2. 2,000 円 | 9. 9,000 円 | |
| 3. 3,000 円 | 10. 10,000 円 | |
| 4. 4,000 円 | 11. 11,000 円 | |
| 5. 5,000 円 | 12. 12,000 円 | |
| 6. 6,000 円 | 13. 13,000 円 | |
| 7. 7,000 円 | 14. 14,000 円 | |

Q 8. その他 お気づきの点などあればお書きください。

ご協力ありがとうございました。

【お問い合わせ】

中高生パラスポーツクラブ 担当：北尾・西森

TEL：(078) 743-8193

E-mail：psc@shiawasenomura.org

●運動指導における工夫

<共通>

- ・声だけではなく、視覚的に伝える工夫が必要
→ホワイトボード、イラスト、番号表示、位置テープの活用
- ・指導者が声かけがしやすいように、参加者の胸に「ニックネーム」を書いた名札シールを貼ってもらった。
- ・指導者が「やってみせる」

<ダンス>

- ・子どもたちが興味を持つ選曲（話の中で引きだしていく）
- ・個人の動きと仲間とつながる動き
- ・原曲のダンスのコピーで踊る楽しさ、自分たちで自由に考えて動く楽しさ
- ・ボール等の用具の使用
- ・「発表タイム」の特別感（カラー布を使った装飾等）

<卓球>

- ・ラケット、ボールになじむ（ボールを載せて歩く、つきながら歩く等）
- ・レベルに応じたマンツーマン指導と仲間同士のラリー
- ・ゲーム性（例：ラリー回数、打ち返す位置等）、チーム対抗
- ・サーブが上手く打てない子どもに身近なものを使って練習する工夫（紙コップとストローでボールを載せる台を作成）

<テニス>

- ・打つ位置、待機する場所をわかりやすくするためにカラーフープ、カラーコーン等を目印に使用
- ・サブ指導者に知的障がい者を対象にした「パリーテニス（ラリーを続けるテニス）」を考案し活動しているNPO法人から指導者（支援学校教員OB）を招聘

<バドミントン>

- ・説明をした時の子どもたちの反応を見て、運動する時間に長短をつけた（参加者全員がバドミントン経験者であり、比較的スムーズに指示が理解できていた）

<陸上>

- ・子どもが自分の記録（距離、間隔）を分かるようにカラーコーンを目印に配置

<その他>

- ・陸上参加者で、これまで学校での「ボール投げ」では投げた球がコース外にそれてしまうため記録を測定してもらうことができなかった子ども（片側に麻痺あり）が、今回、初めて「ジャベリックスロー」を体験、まっすぐに飛び、距離が出たことに本人、保護者が大変驚き「できる（楽しめる）スポーツが増えた」と喜び、以降の回も意欲的に運動に取り組むことができた。

神戸市内における特別支援学校（中等部・高等部）の授業実施状況

金山千広（立命館大学）

稲田虎太郎（立命館大学産業社会学部 4 年）

1. 特別支援教育と障害児の体育授業

平成 19 年(2007)に文部科学省により、これまでの障害種と障害の程度によって就学先を決めていた「特殊教育」から、幼児および児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高めて生活や学習上の困難を改善または克服する「特別支援教育」へと教育制度が転換した。しかし、概念が先走りするだけで、形式的な変化に過ぎない問題も多々出てきている。例えば、現在、知的障害と肢体不自由の児童生徒が同じ校舎(キャンパス)で学ぶ学校は 100 校を超えているが、実態は同じ場所に学校が 2 つあるようなもので、日常の学習の場所や遠足、体育行事において共に同じ場で学ぶ学校は極めて少ない。他にも、それまでの障害の範囲の価値観が大幅に変わったことにより、知的や発達に遅れがなくても特別支援学級に在籍している児童・生徒に対する体育授業の課題はより複雑化している。運動能力が他の障害児生徒よりも長けているのにも関わらず、通常学級の子と同じ環境下でスポーツを享受できないのは現代の障害児の体育における非常に大きな課題となった(後藤,2016,pp10-12)。この意見を参考にするならば、障害の有無に加えて、障害の種類、障害の程度によるインクルージョンにも注目すべきである。

2. 特別支援学校（中等部・高等部）での体育授業に関する相対的な報告の少なさ

特別支援学校中学部・高等部に入学してくる発達障害の子どもたちの中には、体育を嫌いと言う子どもが少なくない。彼らは体育の授業で、障害があるゆえの分からなさやできなさ、辛さやしんどさを理解してもらえず、「分かっている楽しさ」「自らの能力を仲間の中で発揮する心地よさ」を体感することができない。また、体育の楽しさをわからなくてもよいと言われ、本人にとって取り組む意味がわからないまま、体力づくりや運動量確保を目的にした長距離走などをさせられる教育で、より嫌いになる。他には、攻防入り乱れるバスケットボールのゲーム授業などにおいて、人とボールが行きかう中で困っている子どもが多い問題や、持久走で座り込み、教師に言葉をかけられるとより強固に拒絶して動かなくなる子どもの姿も目にする。わかりやすくてよいという理由でサーキットに従事する学校も多いが、「見通しをもって」「主体的に走るように」とカードやシールなどを持たされて自閉症の子どもが真剣に何度も周回している様子を見ると、何に楽しさを感じさせているか疑問である(大宮,2016,p.19)。

特別なニーズのある児童・生徒を対象とした個別的、もしくは小グループに対応する体育の授業内容に関する報告は多数ある。しかしながら、特別支援学校で実施される単元を相対的に検討した体育の授業内容の傾向に関する調査報告は少ない。その中で渡邊ら(2007)は、公立の特別支援学校の小学部 255 校、中学部 255 校、高等部 276 校の体育担当教員を対象とした調査を行った。勤務平均年数は、小学部で平均 13.7 年、中学部で 13.6 年、高等部で 14.2 年である。特別支援学校(特別支援学級も含む)の勤務年数は、小学部は平均 10.8 年、中学部は 9.7 年、高等部は 10.1 年であった。担当している体育の授業の児童・生徒の人数及び教師の指導体制は、小学部では平均児童数 17 人に対して教員数 9 人、中学部では平均生徒数 23 人に対して教員数 10 人、高等部では平均生徒数 35 人に対して教員数 11 人であった。部では平均生徒数 23 人に対して教員数 10 人、高等部では平均生徒数 35 人に対して教員 11 人であった。

次に教育課程に関して、「体育の目標やねらいで特に重要視しているものは」の質問に対する回答(複数回答)として、小学部では「身体の動きづくり」が 176 校(88.0%)と最も多く、次いで「体づくり」が 155 校(77.5%)、「健康づくり」が 107 校(53.5%)であった。中学部は「体づくり」が 153 校(74.2%)、「身体の動きづくり」が 148 校(71.8%)、「健康づくり」が 143 校(69.4%)であった。高等部は「体づくり」が 135 校(72.5%)、「健康づくり」が 121 校(65.0%)、「身体の動きづくり」が 106 校(56.9%)であった。「社会性の向上」、「仲間づくり」、「余暇の充実」といった他の項目については、小学部、中学部ではそれほど重要視されていなかったが、高等部において「余暇の充実」が 66 校(32.0%)、「仲間づくり」が 47 校(25.2%)と他学部比べて高い結果が得られた。特別支援学校の体育授業において「この一年間に指導した、または指導しようと計画している題材や単元」は、小学部、中学部、高等部ともに「歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動」や「水泳(水遊びや水の中での運動を含む)」が 80%以上と高い。逆に「器具、用具を使った遊びや運動」、「表現遊び、表現運動」は学部段階があがるにつれて少なくなっていた(橋本ら,2007,pp2-3)。

3.神戸市内の特別支援学校中部・高等部における体育授業の現状

3.1 目的及び方法

2022 年度こうべ市民福祉振興協会では、スポーツ庁の「障害者スポーツ推進プロジェクト(障害者スポーツ提供体制整備事業)」受託事業として、「しあわせの村ふれあいスポーツチャレンジ」を実施した。この事業は市内の特別支援学校と連携し、障害のある児童生徒が楽しめる「場」および運動不足の解消を目的としたプログラムを提供することを目的とする。「運動を通じた障害者の居場所づくり」や競技への興味・関心、仲間づくりのきっかけをつくることで卒業後の運動習慣や余暇活動の向上につなげることを目指している(神戸市,「しあわせの村 ふれあいスポーツチャレンジ 『中高生パラスポーツクラブ』の実施」)。ふれあいスポーツチャレンジの実施を背景に、ここでは市内の特別支援学校を対象に、特別支援学校中部・高校部の体育授業体制及び内容を把握することとした。

調査は学校名を含めて無記名で実施した。各学校の中部・高等部の体育主任及びそれに準ずる立場の教員 1 名が質問紙調査に回答した。神戸市内の特別支援学校 11 校中 10 校より回答があった。調査内容は、(1) 学校属性、(2) 実施校(中部・高等部)の体育授業である。実施期間は 2022 年 9 月であった。

3.2 結果

3.2.1 実施校(学部)の回答者属性

回答校(学部)の体育授業について報告する。回答者の属性は表 1 の通りである。年齢層は、体育主任もしくはそれに準ずる教員にアンケート回答を求めていることもあり、41 歳以上の割合が多くを占める。免許・資格では、保健体育の免許を保有する教員は多いものの、障害者スポーツ指導員の資格保有者が 1 人しかいなかった。公的な教員資格は当然ながら多い。障害者スポーツやアダプテッドスポーツなど、障害者のスポーツ環境において大きな影響をもたらす資格・免許等の取得はまだまだ課題を有す現状であることが分かる。

3.2.2 回答校の体育授業について

体育授業体制は以下に示した表 2、表 3 の通りである。まず、表 3 に示した体育授業を担当している教

員については、全 10 校において体育の免許状を有している教員が担当していることが明らかになった。1 校の未回答を除いて全ての学校において体育の免許状を取得した教員が授業を担当していることについては、通常校と同様の状況である。今回は問うていないが、担当教員の特別支援学校や特別支援教育に従事したキャリアも気になる。

表 1 回答者の属性

属性	項目	度数	(%)
年代	21-30	3	7.3
	31-40	2	18.1
	41-50	3	27.3
	51-60	3	27.3
	無回答	0	0.0
	合計	11	100.0
立場(複数回答)	体育授業担当教員	5	45.5
	体育教員資格所有教員	2	18.1
	体育主任	8	72.7
	教務主任	0	0.0
	教頭	0	0.0
	副校長	0	0.0
	校長	1	9.1
	特別支援教育コーディネーター	0	0.0
	その他(高1学年主任)	1	9.1
免許・資格(複数回答)	高等学校教諭(保健体育)	9	81.8
	中学校教諭(保健体育)	9	81.8
	特別支援学校教諭	9	81.8
	小学校教諭	2	18.1
	障害者スポーツ指導員	1	9.1
	その他	0	0.0
経験年数	教員(平均・標準偏差)	17.9	11.3
	特別支援教育(平均・標準偏差)	9.2	7.6

表 2 授業担当者の状況

項目	度数	(%)
体育の免許状を有している教員	10	100.0
体育以外の免許状を有している教員	0	0.0
その他	0	0.0

表 3 授業の体制

項目	度数	(%)
一人の教員	1	10.0
複数の教員	8	80.0
その他(2グループに分かれて行う)	1	10.0

次に、体育授業における体制についてという質問に対する結果は表 3 の通りである。一人の教員が授業を担当している学校が 1 校、複数の教員が授業を担当している学校が 8 校、その他として 2 グループに分けて授業を行う学校が 1 校という結果になった。結果から、特別支援学校の体育授業においては複数の教員が授業を担当する、あるいは 2 グループに授業を分けるなどの工夫を行い、出来るだけ教員が抱える生徒の数を少なくして対生徒比を下げていることがわかる。また、この結果においては上記した全国的な傾向と類似しており、授業を複数の教員やグループで行うことで生徒の安全確認や教科指導に取り組まれていることが理解できた。

表 4 2022 年度に体育授業で実施または実施予定の種目

領域	種目名	中学部		高等部		全体	
		度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
運動遊び	多様な動きをつくる運動遊び	3	100.0	4	100.0	8	72.7
	器械・器具を使った運動遊び	2	66.7	2	66.7	4	36.4
	走運動遊び	3	100.0	3	100.0	7	63.6
	跳運動遊び	2	66.7	2	66.7	4	36.4
	力試し運動遊び	1	33.3	1	33.3	2	18.2
	水遊び	1	33.3	0	33.3	3	27.3
	浮く・泳ぐ運動	0	0.0	1	0.0	2	18.2
	表現リズム遊び	2	66.7	2	66.7	4	36.4
ゲーム・ボール運動	仲間との競争的遊び活動	2	66.7	3	66.7	6	54.5
	ボール投げゲーム	3	100.0	2	100.0	6	54.5
	ボールけりゲーム	3	100.0	2	100.0	5	45.5
	鬼遊び	1	33.3	1	33.3	2	18.2
	ゴール型ゲーム	3	100.0	3	100.0	8	72.7
	ネット型ゲーム	2	66.7	2	66.7	7	63.6
	ベースボール型ゲーム	1	33.3	4	33.3	5	45.5
	その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0
A体づくり運動	ラジオ体操	3	100.0	5	100.0	10	90.9
	リズムに乗った体操	2	66.7	3	66.7	5	45.5
	ストレッチ	3	100.0	5	100.0	11	100.0
	仲間とあわせて行う運動	2	66.7	2	66.7	5	45.5
	いろいろな条件で歩いたり走ったり飛び跳ねたりする	1	33.3	2	33.3	4	36.4
	柔軟性を高める運動	2	66.7	1	66.7	5	45.5
	バランス	2	66.7	2	66.7	5	45.5
	用具を投げたり受けたりする	2	66.7	1	66.7	3	27.3
	様々な空間移動	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	体重負荷を使った運動	1	33.3	2	33.3	3	27.3
	用具を使う運動	2	66.7	1	66.7	4	36.4
	ウォーキング	2	66.7	3	66.7	7	63.6
	ジョギング	2	66.7	4	66.7	7	63.6
	縄跳び	2	66.7	2	66.7	5	45.5
	サーキット運動	3	100.0	4	100.0	8	72.7
	ボール・輪・棒を使った体操	2	66.7	1	66.7	5	45.5
	その他(力強い動きを高めるための運動)	0	0.0	1	0.0	1	9.1
B器械運動	マット運動	1	33.3	0	33.3	2	18.2
	鉄棒運動	1	33.3	1	33.3	2	18.2
	平均台運動	2	66.7	1	66.7	3	27.3
	跳び箱運動	1	33.3	0	33.3	1	9.1
C陸上競技	短距離走	2	66.7	3	66.7	7	63.6
	リレー	2	66.7	4	66.7	7	63.6
	長距離走	1	33.3	2	33.3	4	36.4
	ハードル	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	走り幅跳び	0	0.0	0	0.0	2	18.2
	走り高跳び	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	投てき	0	0.0	0	0.0	1	9.1
D水泳	クロール	0	0.0	2	0.0	4	36.4
	平泳ぎ	0	0.0	2	0.0	4	36.4
	背泳ぎ	0	0.0	1	0.0	2	18.2
	バタフライ	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	複数の泳法で泳ぐ	0	0.0	1	0.0	2	18.2
	リレー	0	0.0	0	0.0	1	9.1
E球技	バスケット	1	33.3	3	33.3	5	45.5
	ハンドボール	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	サッカー	1	33.3	3	33.3	4	36.4
	バレーボール	2	66.7	1	66.7	4	36.4
	卓球	1	33.3	2	33.3	4	36.4
	テニス	2	66.7	1	66.7	2	18.2
	バドミントン	2	66.7	1	66.7	4	36.4
	ソフトボール	0	0.0	4	0.0	2	18.2
	その他(ゴール型)	0	0.0	2	0.0	3	27.3
	その他(ブラインドサッカー)	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	その他(ネット型)	0	0.0	1	0.0	2	18.2
	その他(シットイング)	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	その他(フロアバレー)	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	その他(ベースボール型)	0	0.0	1	0.0	2	18.2
	その他(キックベース)	1	33.3	0	33.3	1	9.1
	その他(ティーボール)	1	33.3	1	33.3	2	18.2
F武道	柔道	0	0.0	1	0.0	1	9.1
	剣道	1	33.3	0	33.3	1	9.1
	相撲	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他(空手)	1	33.3	1	33.3	1	9.1
Gダンス	創作的ダンス	0	0.0	1	0.0	2	18.2
	フォークダンス	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	現代的なリズムのダンス	2	66.7	2	66.7	5	45.5
	その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0

3.2.3 2022 年度に体育授業で実施または実施予定の種目

(1) 運動遊び

運動遊びの全体の実施率として、「多様な動きをつくる運動遊び」「走運動遊び」が比較的多くの学校で実施されていた(72.7%, 63.6%)。対して、「力試し運動遊び」「水遊び」「浮く・泳ぐ運動」においては実施率が低い傾向にあった(18.2%, 27.3%, 18.2%)。結果から、導入が容易であり、他者と関わる運動遊びが実施されていることが明らかになった。

(2) ゲーム・ボール運動

全体の実施率として「ゴール型ゲーム」「ネット型ゲーム」の実施率は比較的多くの学校で実施されていた(72.7%, 63.6%)。特に中学部においては、「ボール投げゲーム」「ボールけりゲーム」「ゴール型ゲーム」において高い実施率を示した(全て 100.0%)。その一方で、全体の傾向として「鬼遊び」の実施率が低かった(18.2%)。結果から、ゲーム形式下において特にアダプテッド体育に関して応用がしやすいゲームの導入が多いことが明らかになった。鬼遊びのような他者との関りが深く、ルールを重視するゲーム種目は、小学校から少しずつルールを重ねて、中等部・高等部でも対応しているようである。

(3) A 体づくり運動

全体の実施率として、「ラジオ体操」「ストレッチ」が極めて多くの学校で実施されていた(90.9%, 100%)。対して、「様々な空間移動」「用具を投げたり受けたりする」「体重負荷を使った運動」においては全体の実施率として低い現状であった(0%, 27.3%, 27.3%)。この結果から、ラジオ体操やストレッチなど負荷の軽い種目においては実施が高い現状にあるが、用具の投げ受けや体重負荷の運動においては、児童の体にかかる負荷が大きいため実施しにくい現状にあることが明らかになった。また、様々な空間移動のような複雑な空間認識力が必要な種目も難しい現状にあるのかもしれない。

(4) B 器械運動

全体の実施率として、「マット運動」「鉄棒運動」「平均台運動」「跳び箱運動」どの種目においても器械運動の実施率は低い現状であった(18.2%, 18.2%, 27.3%, 9.1%)。「平均台運動」においては中学部で 66.7%と高い実施率を示す。しかし、全体で見ると低い現状にある。クローズドスキルを代表する器械運動は、個別目標を設定しやすく、できる、達成する体験を得やすい種目である。通常校では多く実施されているが、特別支援学校では少ない傾向にある。

(5) C 陸上競技

全体の実施率として、「短距離走」「リレー」の実施率が高かった(両 63.6%)。対して、「ハードル」「走り高跳び」「投てき」における実施率は低い現状にあった(9.1%, 0%, 9.1%)。結果から、クローズドスキルである短距離走の実施率は高い。種目特性を有し仲間と協力できる種目(今回であればリレー)の実施においても積極的であることが分かった。

(6) D 水泳

全体の実施率として、高い実施率を示す「クロール」「平泳ぎ」でもその実施率は 36.4%に留まっている。特に中学部では全種目の実施が無い現状にあることなど、特別支援学校においては、水泳の種目実施が難しいことがうかがえる。

(7) E 球技

全体の実施率として、球技種目の中では「バスケット」「サッカー」「バレー」「卓球」「バドミントン」とメジャーな種目の実施率は高かった(45.5%,36.4%,36.4%,36.4%,36.4%)。オープンスキルである球技種目はルールの複雑性、高い競技性が伴う。また、状況判断が求められる。

(8) F 武道

柔道、剣道、相撲とどの種目においても実施率は低かった(9.1%,9.1%,0%)。結果から、支援学校で武道を展開することは難しい状況にあることを予想した。

(9) G ダンス

創作的ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスでは、現代的なリズムに乗ったダンスが高い(18.2%,0%,45.5%)。現代的なリズムのダンスが中学部・高等部ともに他種目に比べ実施率が高い(66.7%,40.0%)現状にあり、生徒の興味を惹きやすいという背景があるのかもしれない。

1. まとめ

本研究は、障害者スポーツ推進プロジェクトを受託したこうべ市民福祉振興協会が事業の対象とする神戸市内に所在する特別支援学校の中・高等部に焦点を当て、体育授業の実態を明らかにすることを目的とした。体育授業に関するアンケート調査を 11 校に求めた。その結果、以下のような示唆を得た。

1)種目の実施に偏りがある問題

1 点目は、特別支援学校において球技領域、武道領域における種目実施率が極めて低く、他の領域との偏りが顕著であった。球技領域や武道領域は、種目が有すルールや規制の強さ、また高負荷がかかるという体力面からその実施が困難であることを予想した。反面、運動遊びやゲーム・ボール運動といった領域は、ルールを障害の程度によって柔軟に合わせやすいことや、負荷がそれほど高くないといった背景から積極的に用いられているようである。

2)通常学級と特別支援学校で実施種目に差がある問題

下村・金山(2008)の報告を参考にするならば、通常学級では球技領域や陸上領域の種目実施率が高かったのに対し、特別支援学校では運動遊びやゲーム・ボール運動、A 体づくり運動領域の実施が高かった。この要因は、1 点目に示したように、種目や競技の持つ特性と障害を抱える児童生徒の障害の程度が影響を及ぼすことである。

3)それらの問題を改善する教員の工夫

3 点目は、上記 2 点に挙げた問題を改善しようと、現場教員による種目実施の工夫が見られた点である。障害の重さや、種目特性により本来の球技領域で得られる学習効果を特別支援学校に通う児童生徒は十分に得ることが困難なため、それに類似した種目をゲーム・ボール運動の領域で行っていた。このこ

とから、通常学級の児童生徒と特別支援学校の児童生徒が得る体育授業における学習効果において、その差異ができるだけ小さくなるよう努めていることが理解できる。

引用参考文献

後藤邦夫,2016,『特別支援教育時代の体育・スポーツ』株式会社大修館書店。

渡邊貴裕,橋本創一,菅野敦,中村勝二, 2007,「特別支援学校における体育の教育課程に関する研究」『発達障害支援システム学研究』 6(2): 45-51.

大宮ともこ,2016,「障害児体育の現状と課題」『障害者問題研究-障害者問題研究編集委員会』 47(3),178-185.

下村雅昭・金山千広,2008,「中学校における障害のある生徒の体育授業に関する研究—近畿地区の実態調査から—」『京都女子大学生活福祉学科紀要』 4,19-25.

文部科学省,2020,『特別支援教育資料(令和元年度)』

https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt_tokubetu02-000009987_03.pdf(最終閲覧日 2024年1月8日).

文部科学省,2021,『特別支援教育の現状』

https://www.mext.go.jp/content/20210412-mxt_tokubetu01-000012615_10.pdf(最終閲覧日 2024年1月8日).

スポーツ庁,『第 29 回スポーツ審議会総会・第 11 回スポーツ基本計画総会合同会議配布資料』

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/shiryo/jsa_00026.html
(最終閲覧日 2024年1月8日).

笹川スポーツ財団,2016,「特別支援学校のスポーツ環境に関する調査」,p63

https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2017_report_35_2_2.pdf(最終閲覧日 2024年1月8日).

神戸市役所ホームページ,「しあわせの村 ふれあいスポーツチャレンジ『中高生パラスポーツクラブ』の実施」

<https://www.city.kobe.lg.jp/a06448/shiawasenomura/press/202208/866031381687.html>(最終閲覧日 2024年1月8日).

神戸市内の支援学校中学・高等部に在籍する生徒のスポーツ環境

池田大晟 立命館大学産業社会学部 4年

金山千広 立命館大学産業社会学部

1. 目的

中高生パラスポーツクラブは、身近な地域で生涯にわたって運動できる居場所づくりを目指している。本調査ではパラスポーツクラブの目的を背景に、事業のベースとなる神戸市内の特別支援学校の運動部活動・クラブ活動及び体育授業以外のスポーツの機会(体育行事など)の現状を把握することを目的とした。

2. 方法

本研究の質問紙調査は、神戸市内の特別支援学校 11 校に加えて、中高生パラスポーツクラブに参加する支援学校 1 校(いぶき明生、青陽須磨、灘さくら、青陽灘高等、友生、盲、神戸大学附属、県立視覚、のじぎく特別、県立聴覚、西神戸高等特別、県立神戸特別)を対象に実施した。調査票は、中学部若しくは高等部の体育主任及びそれに準ずる立場の教員 1 名に回答してもらうこととした。調査は学校名を含めて無記名で実施した。ここでは、(1)回答校の属性、(2)通常の体育授業以外のスポーツの機会、(3)神戸市内にある特別支援学校の運動部活動の状況、の 3 つのカテゴリーを報告する。実施期間は 2022 年 9 月であった。

3. 結果と考察

(1) 回答校の属性

回答は、調査を依頼した 12 校のうち 11 校より得た。学校規模、回答者の学部、生徒の状況を表 1～3 に示す。学校規模を示す児童生徒数の平均値は 134.3、教員数の平均値は 95.3 である。無回答が 1 校あった。回答者は、中学部所属が 3 名、高等部所属が 5 名、中学部・高等部の合同が 3 名である。なお、回答校のうち高等部のみで運営されている高等支援学校は 2 校ある。表 3 は生徒の状況を複数回答で尋ねたものである。知的障害と肢体不自由が多い。

(2) 通常の体育授業以外のスポーツの機会(体育行事など)

通常の体育授業以外のスポーツの機会について報告する。調査内容は表 4 のとおりである。運動会・体育祭を実施していない学校は 4 校。マラソン大会を実施していない学校は 8 校、通常校との交流を実施していない学校は 7 校、他の支援学校との交流を実施していない学校は 9 校である。一方で、県大会等の参加を支援している学校が 9 校、県大会等への練習を実施している学校は 5 校、部活動・クラブ活動を実施している学校は 6 校あった。全国的に特別支援学校の運動部活動は 6 割の学校でしか実施されていないことが報告されている(笹川スポーツ財団, 2016)。神戸市内の特別支援学校も

表1 学校規模

項目	度数	平均値	標準偏差
児童生徒数	10	134.3	102.01
全学級数	10	38.2	27.54
教員数	10	95.3	63.68

表2 回答者の所属

項目	度数	(%)
中学部所属	3	27.3
高等部所属	5	45.5
合同	3	27.3
合計	11	100.0

表3 生徒の状況(複数回答)

項目	度数	(%)
視覚障害	2	18.2
聴覚障害	1	9.1
知的障害	7	63.6
肢体不自由	6	54.5
病弱・虚弱	1	9.1

同様の傾向にあった。また、全国障害者スポーツ大会につながる兵庫県及び神戸市の障害者スポーツ大会に出場する生徒は 8 割以上の学校に存在している。大会に向けた練習も 45%の学校が実施している。このことは、市及び県の障害者スポーツ大会が、特別支援学校の体育授業以外のスポーツの機会拡大につながることを示している。全国障害者スポーツ大会の開催も間接的に特別支援学校のスポーツの機会拡大関与する可能性が高い。学校側が企画運営する体育行事などは活発でない印象を受けた。

表 4 体育授業以外のスポーツの機会(体育行事など)

項目		実施しており全ての生徒が参加している	実施しておりほとんどの生徒が参加している	実施しており半数程度の生徒が参加している	実施しており一部の生徒が参加している	実施していない	無回答	合計
学校の運動会・体育祭	度数	5	2	0	0	4	0	11
	%	45.5	18.2	0.0	0.0	36.4	0.0	100.0
マラソン大会	度数	1	0	0	1	8	1	11
	%	9.1	0.0	0.0	9.1	72.7	9.1	100.0
スポーツ・レクリエーションを通した通常校との交流	度数	1	0	0	1	8	1	11
	%	9.1	0.0	0.0	9.1	72.7	9.1	100.0
スポーツ・レクリエーションを通した特別支援学校同士の交流	度数	0	0	0	1	9	0	11
	%	0.0	0.0	0.0	9.1	81.8	0.0	100.0
県の障害者スポーツ大会や市の障害者スポーツ大会参加	度数	1	0	0	8	2	0	11
	%	9.1	0.0	0.0	72.7	18.2	0.0	100.0
県の障害者スポーツ大会や市の障害者スポーツ大会に向けた練習	度数	0	0	0	5	6	0	11
	%	0	0	0	45.5	54.5	0.0	100.0
夏休みのプール開放	度数	2	0	0	0	9	0	11
	%	18.2	0.0	0.0	0.0	81.8	0.0	100.0
運動部活動・クラブ活動	度数	1	2	2	2	4	0	11
	%	9.1	18.2	18.2	18.2	36.4	0.0	100.0
校内大会(スポーツ・レクリエーション)	度数	3	1	0	0	7	0	11
	%	27.3	9.1	0.0	0.0	63.6	0.0	100.0
具体的な種目: 転がしドッジボール、シットイング風船バレー、キックベースボール、リレー駅伝、フロアーバレーボール								

(3) 神戸市内にある特別支援学校の運動部活動の状況

回答校の中で、運動部活動を実施している学校は 7 校(63.6%)であった。表 5 は部活動実施種目を複数回答で問うたものである。卓球が全体の 85.7%で、部活動を実施している 7 校のうち 6 校で開催している。次いで陸上競技が多い。知的障害・発達障害はクローズドスキルを好む傾向にあるが、オープンスキルの中でも卓球は知的障害のある選手に向けた種目である。部活動を実施している学校では、サッカー、バレーボール、バスケットボール等のオープンスキルに対応する種目も多い。重度障害を対象としたボッチャ、視覚障害に対応したゴールボール等も実施されている。笹川スポーツ財団(2016)によれば、全国の特別支援学校の運動部活動・クラブ活動の実施種目について、中学部では、陸上競技(52.4%)が過半数を占め、次いで卓球(30.4%)、サッカー(ブラインドサッカーを含む)(25.6%)がある。高等部では、陸上競技(60.7%)が 6 割を超え、サッカー(ブラインドサッカーを含む)(42.9%)、バスケットボール(39.5%)が約 4 割で実施されている。今回の調査でも同様の傾向にあった。加えて、ボッチャやゴールボールなど障害の特性に応じた種目が実施されていたことや、武道(柔道、その他の空

手)が実施されていたことも興味深い。しかしながら、全国障害者スポーツ大会に採用されている種目のフライングディスク、フットベースボールは開催されておらず、ソフトボールも1校のみの実施であった。ヒアリング等で傾向を把握したい。

表6は、部活動の実施の詳細をまとめたものである。練習頻度は週に3回が2校、1回の練習時間は1時間未満から2時間未満までとさまざまである。加えて、運動部活動実施校のほとんどは、対外試合に出場している。休日や長期休暇期間も部活動を実施している学校もある。一方で、授業中のクラブ活動として月1回程度開催している学校もあった。

指導体制を表7にまとめた。指導体制は、複数の教員が担当している。ボランティアや外部指導者を導入している先駆的な学校もある。保健体育教諭の資格を持つ教員がメインで部活動を担当している様子であるが、障害者スポーツ指導員資格を有する教員は1名のみであった。

先の表4に示した体育授業以外のスポーツの機会においては、学校として他の特別支援学校や通常校と交流をする機会が乏しい様子であった。また、校内大会等の体育行事も通常校と比較して、活発とは言い難い。今回の調査では、運動部活動を行うことで、対外試合等をとおして、同じ学校以外の同世代の生徒と交流する可能性が示唆された。

表8と表9は、特別支援学校教員が考える運動部活動の課題及び、地域移行についての考えを自由記述で尋ねたものである。

運動部活動の課題では、生徒の障害の多様性に伴う配慮、スクールバス等の利

表5 運動部活動実施種目(複数回答) n=7		
項目	度数	(%)
1つの部活動を2名以上の教員が担当	6	85.7
1つの部活動を教員とボランティアが担当	1	14.3
1つの部活動を教員と外部指導者が担当	2	28.6
担当部活動のスポーツ種目経験がある	5	71.4
担当母活動のスポーツ種目経験はない	4	57.1
担当部活種目の指導経験が長い	4	57.1
体育の教員資格がある	7	100.0
障害者スポーツ指導員の資格がある	1	9.1

表6 運動部活動の実施状況の詳細(複数回答) n=7		
種目	度数	(%)
卓球(STT含む)	6	85.7
陸上競技	5	71.4
サッカー(7人性・ブラインド含む)	3	42.9
バレーボール(ソフトバレー・フロアバレー含)	3	42.9
バドミントン	2	28.6
バスケットボール	2	28.6
野球(ティーボール含む)	2	28.6
水泳	2	18.2
ゴールボール	2	18.2
ソフトボール	1	14.3
テニス	1	14.3
ボッチャ	1	14.3
柔道	1	14.3
その他(部活動)	1	14.3

表7 運動部活動の指導状況(複数回答) n=7		
項目	度数	(%)
実施日	放課後	6 85.7
	休日(土日)	1 14.3
	祝日	0 0.0
	長期休暇期間	1 14.3
	その他(授業中)	1 14.3
実施頻度	週1回程度	1 14.3
	週2回程度	1 14.3
	週3回程度	2 28.6
	週4回以上	1 14.3
	その他(月1回程度)	1 14.3
	無回答	1 14.3
通常授業が行われている平日の1回の活動時間	1時間未満	2 28.6
	1時間以上1時間30分未満	2 28.6
	1時間以上2時間未満	2 28.6
	2時間以上	0 0.0
通常授業が行われていない日の1回の活動時間	1時間以上2時間未満	3 42.9
大会参加の有無	参加していない	1 14.3
	参加している	6 85.7
参加大会名	神戸市障害者スポーツ大会	3 42.9
	兵庫県障害者のじぎくスポーツ大会	1 14.3
	障害者サッカー大会	1 14.3
	近ろう卓球大会	1 14.3

用を背景としたアクセスビリティの確保に課題があるとした。加えて、放課後等ディサービス、学校、自宅以外の居場所としての機能を求めるならば、支援学校内で運動部活動を展開するよりも、地域で実践した方が良いという意見もあった。

地域移行については、アクセスビリティの問題、指導者の障害に対する知識、指導の力量等が課題として示されている。支持されている点は、地域の居場所づくりとしての機能であった。

表 8 特別支援学校教員が考える運動部活動の課題

特別支援学校における運動部活動の課題について(自由記述)

認知面や実態がそれぞれ異なるため指導するのが難しい。

迎えの関係で参加が難しい生徒がいる。

参加する生徒の実態が多様であれば取り組む内容に困る

活動人数の少なさ

発達段階の違いがある中で競技性を保つルール工夫が必要

放課後は自宅かディサービスで過ごすことが多い。ディサービス以外の居場所として、地域や民間でスポーツが楽しめる場がある方が部活動として実施するより、これからの社会に適していると思う。

視覚障害者のスポーツは独特の競技であるため他校から移動してきた教員が習得するために時間がかかる。

表 9 特別支援学校教員が考える運動部活動の地域移行について

特別支援学校における運動部活動の地域移行について(自由記述)

地域に行く手段が整う制度と難しい生徒がいる。

障害特性の理解やある程度の専門性を兼ね備えた指導者が必要であり、実施する場所の環境を整える必要がある

地域移行は難しいと思います。

競技の専門性とは全く異なる指導になるので実情を見れば難しいのではないかと

地域に居場所を作ることになるのでよい方向だと思う。

表 10 青陽須磨支援学校の部活動ごとの参加人数

	高等部 (人)	中学部 (人)	小学部 (人)	合計 (人)	(備考) 活動頻度
サッカー	11	6	0	17	年約8回
卓球	7	8	0	15	
バスケットボール	14	3	0	17	
陸上競技	10	5	0	15	
ボッチャ	3	4	0	7	
コンピュータ	10	6	0	16	
アイロンビーズ	4	7	0	11	
カラオケ	6	12	0	18	
鉄道	4	11	0	15	
合計 (人)	69	62	0	131	

表 11 県立神戸特別支援学校の部活動ごとの参加人数

	高等部 (人)	中学部 (人)	小学部 (人)	合計 (人)	(備考) 活動頻度
サッカー	9	3	0	12	週2～3回
ランニング	2	1	0	3	週1回
音楽部	2	2	1	5	月1回
合計 (人)	13	6	1	20	

4. 青陽須磨支援学校と県立神戸特別支援学校の部活動ごとの参加人数

表 10 及び表 11 は、2024 年 2 月現在の青陽須磨支援学校と県立神戸特別支援学校の部活動の参加人数及び活動頻度である。青陽須磨支援学校の運動部活動参加者数は 71 名であり、サッカー、卓球、バスケットボールといったオープンスkill種目が多い。運動部活動においてこれら種目はニーズがあることを示す。しかしながら、活動頻度が年間 8 回と非常に少ない状況である。学校と地域が協力体制をもって、これらのニーズを支えることが課題である。また、ボッチャクラブについては、パラスポーツ指導員が関与しやすい種目である。ぜひ、指導員導入を検討できればと考える(表 10 参照)。表 11 の県立神戸特別支援学校では、サッカーとランニングクラブが週 1 回以上、定期的に活動している。スポーツの習慣化は生涯スポーツに通じるが、参加人数がトータル 15 名と少ない。受け入れ側(指導側)の体制の課題であるのか、放課後等ディサービス等との兼ね合いで生徒のライフスタイルの課題であるかを明らかにしたい。

4. まとめ

市内の特別支援学校の運動部活動実施状況は、概ね全国と同傾向を示した。体育授業以外の取り組み状況から、スポーツは生徒に他校や地域とのつながりをもたらす可能性が高いことが示唆された。2022 年 8 月、スポーツ庁は文科大臣政務官を座長とする「障害者スポーツ振興方策に関する検討チーム報告書」(高橋プラン)をまとめた。地方公共団体においては、スポーツ・福祉・医療健康・教育の各部局の連携促進と、国の支援事業の積極的な活用、福祉団体、特別支援学校等の連携体制を計画的に整備することが好ましいと記している。また、特別支援学校の運動部活動の地域移行に向けて、運動部活動の状況を含めた生徒のスポーツ機会の実態や、広域から通学する場合もある生徒の実態等を踏まえ、その実態に即した移行が行われるよう、障害者スポーツに係るリソースの活用と地域の体制整備を図ることとしている。

引用参考文献

- ・笹川スポーツ財団(2016) 支援学校のスポーツ環境に関する調査 ,pp63.
- ・スポーツ庁(2019) 第 29 回スポーツ審議会総会・第 11 回スポーツ基本計画総会合同会議配布資料 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/shiryo/jsa_00026.html(最終閲覧日 2023 年 1 月 19 日).
- ・スポーツ庁(2022) 障害者スポーツ振興方策に関する検討チーム 報告書概要(高橋プラン) https://www.mext.go.jp/sports/content/20220805-kensport01_1379526-001.pdf(最終閲覧日 2023 年 1 月 19 日).